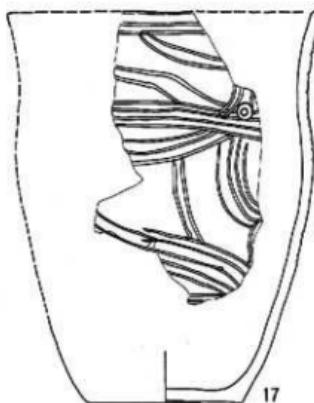
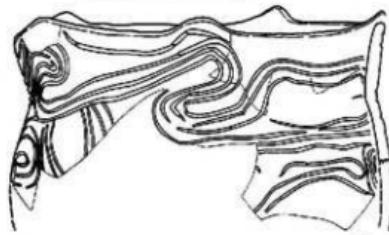
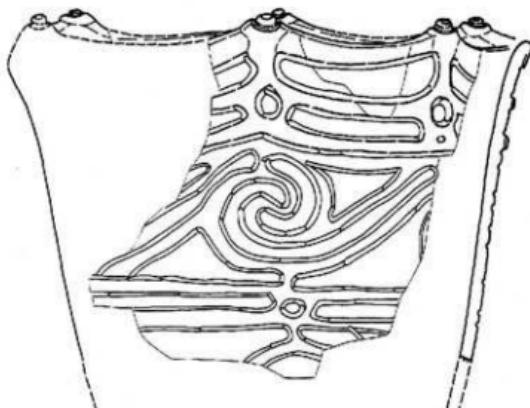


第86図 遺構出土土器実測図(1)

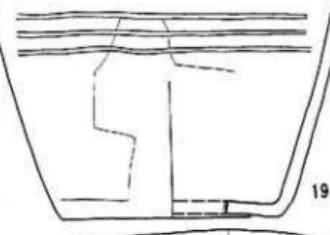
0 10cm



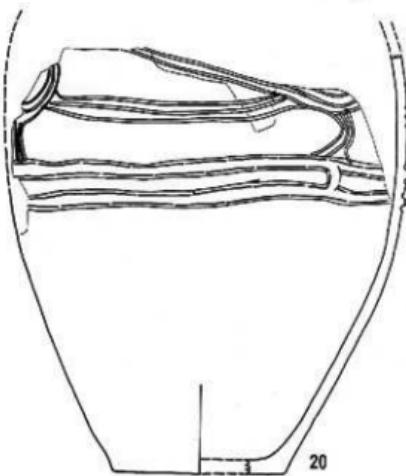
17



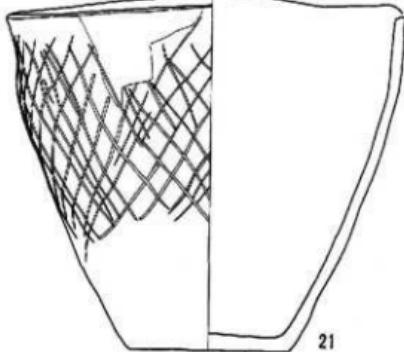
18



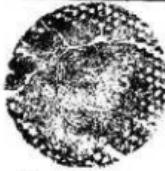
19



20



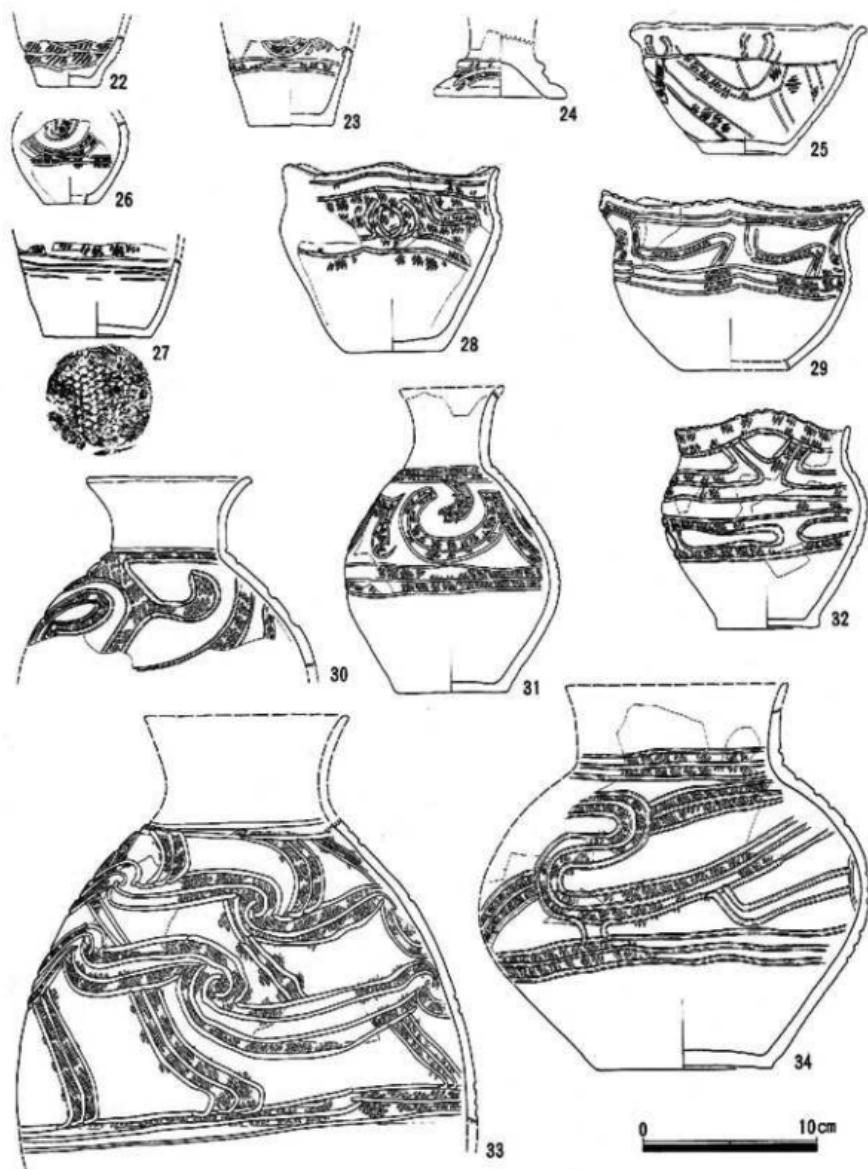
21



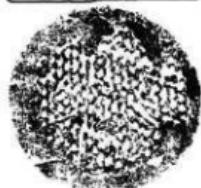
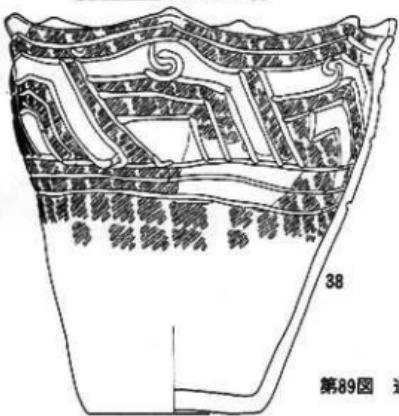
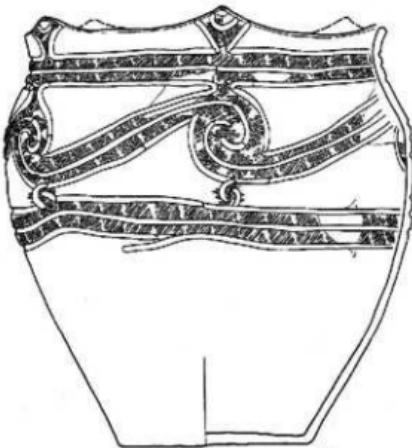
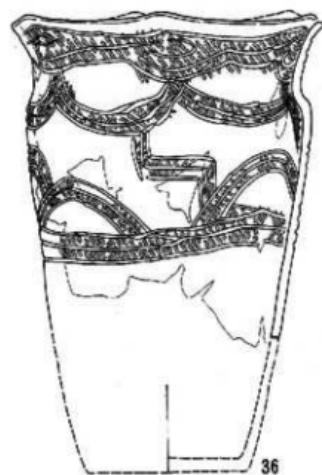
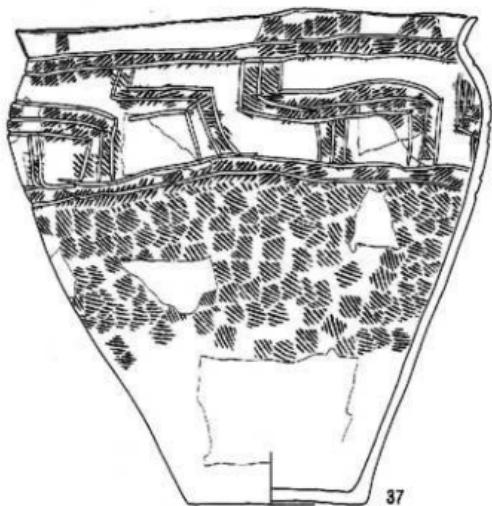
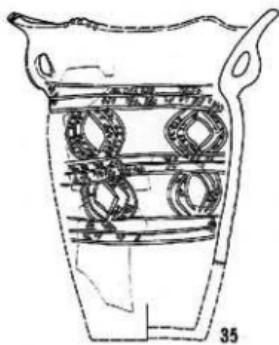
0

10cm

第87図 遺構外出土土器実測図(2)

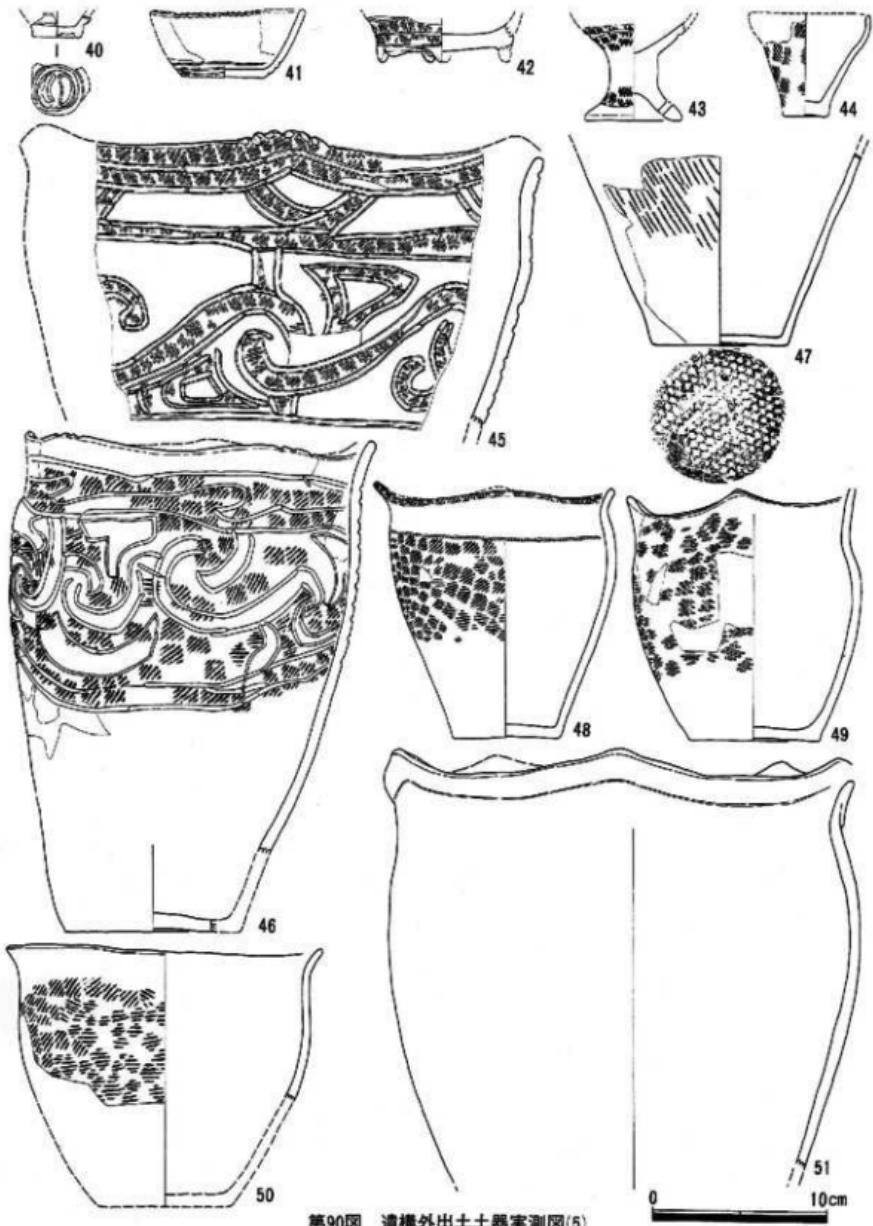


第88図 遺構外出土土器実測図(3)

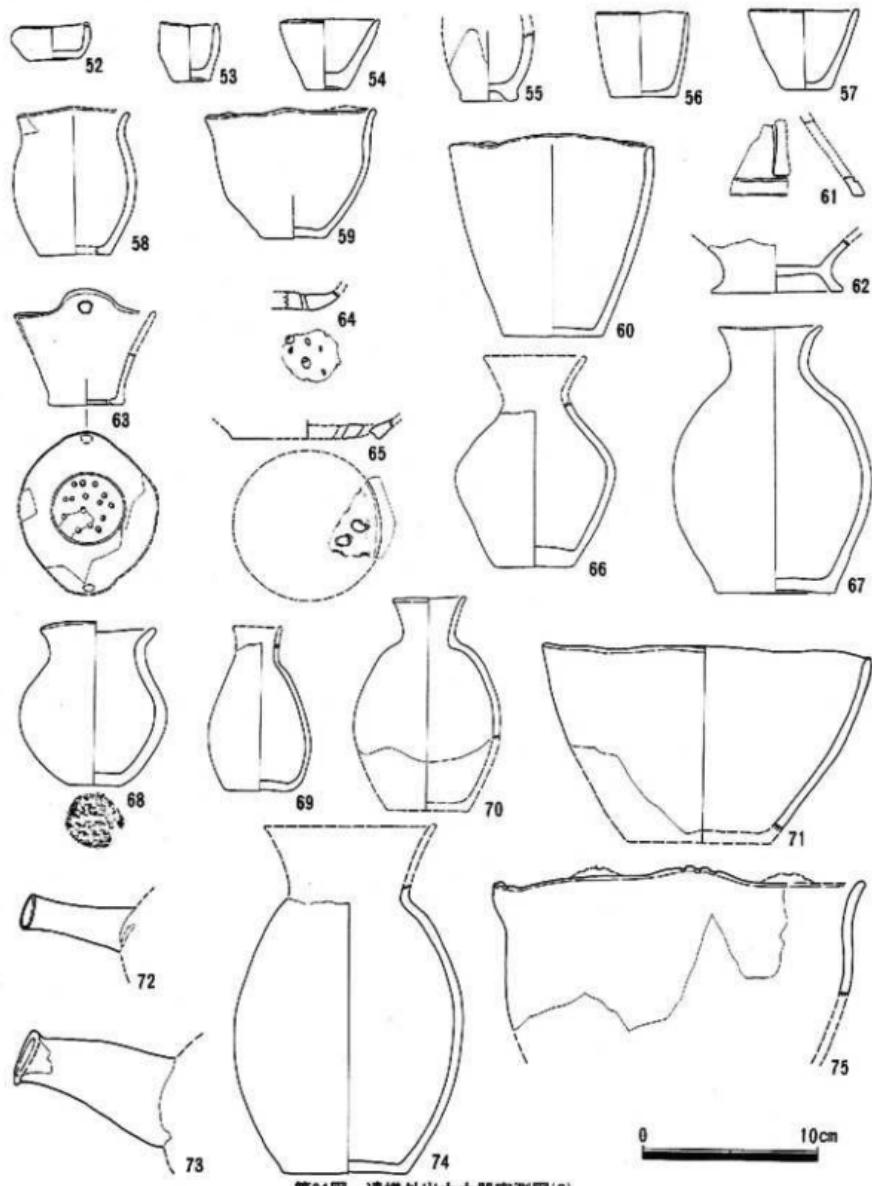


0 10 cm

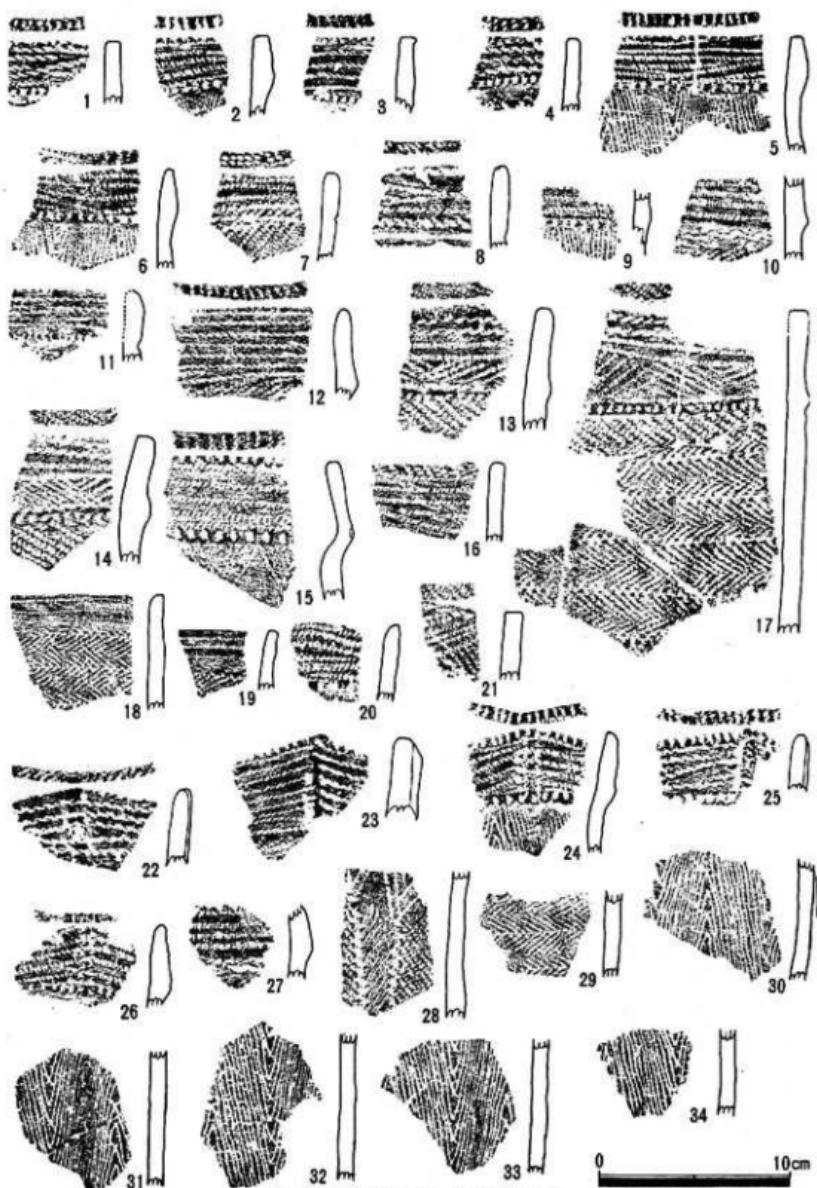
第89図 遺構外出土土器実測図(4)



第90図 遺構出土土器実測図(5)



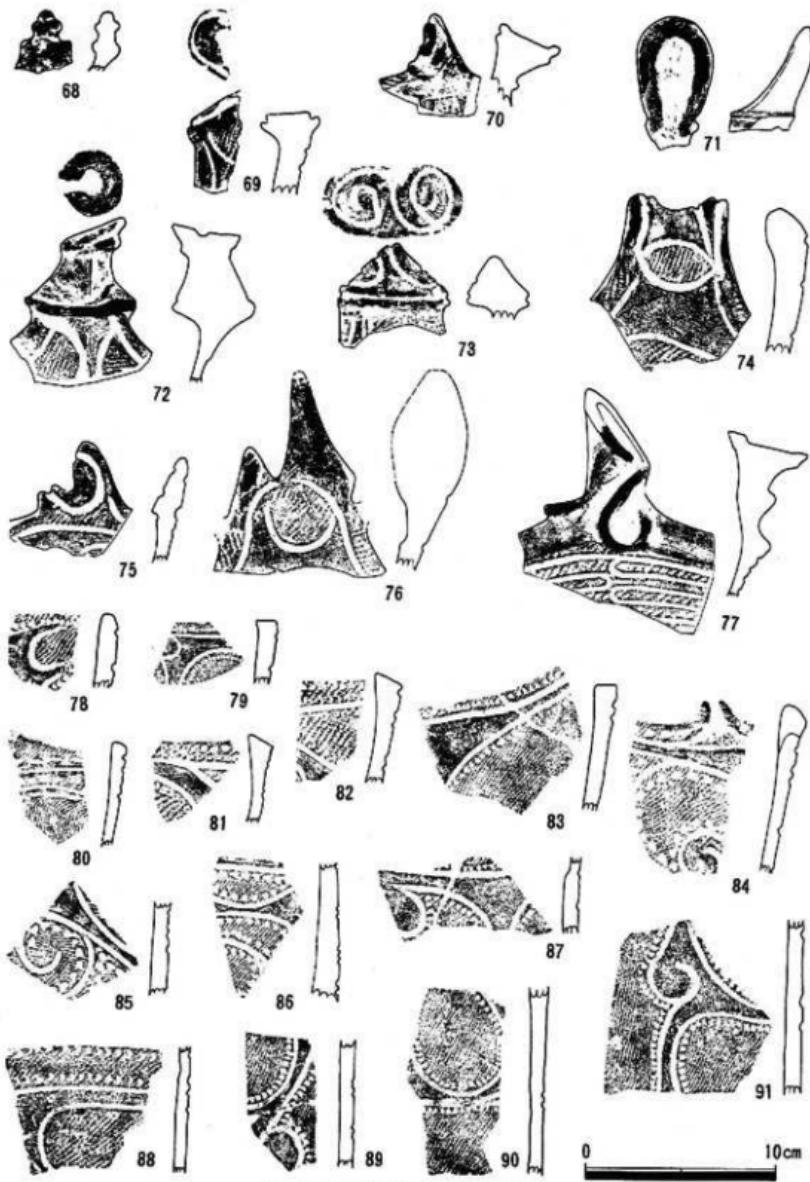
第91図 遺構出土土器実測図(6)



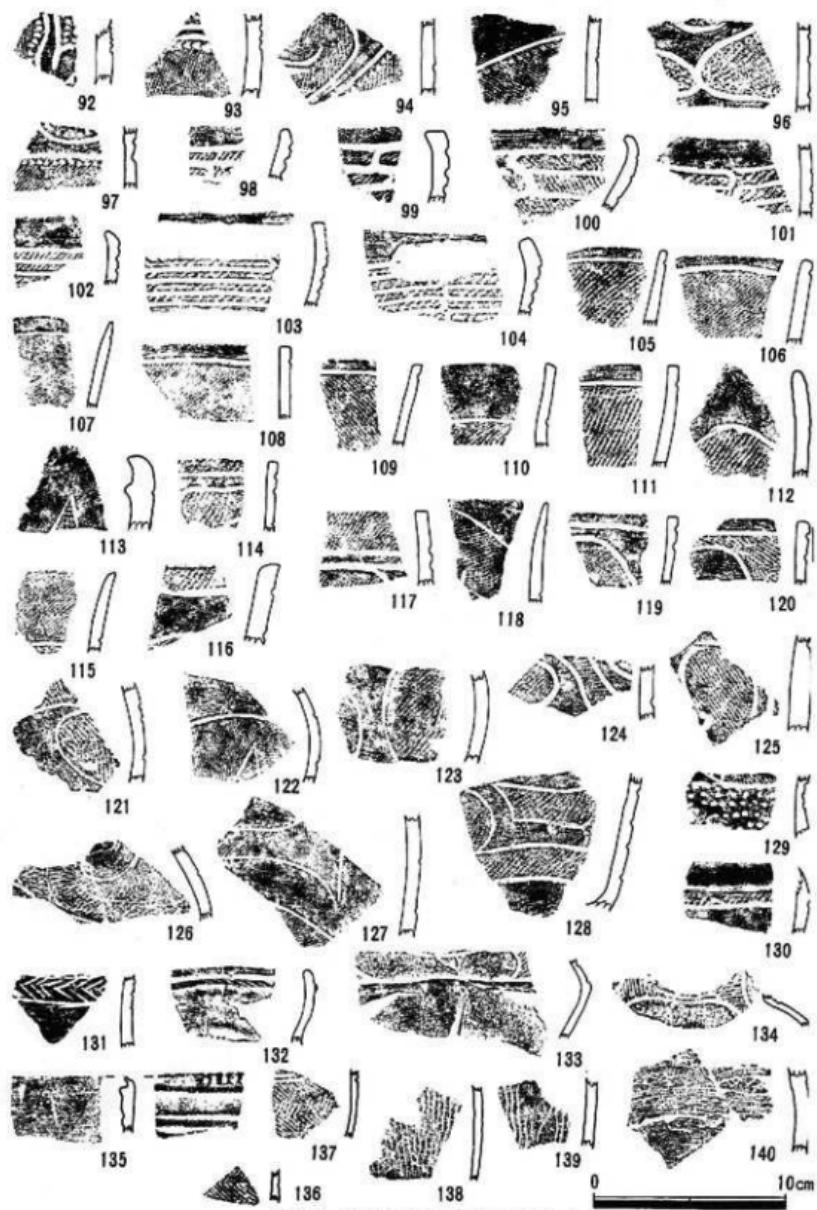
第92図 造構出土土器拓影図(1)



第93図 遺構外出土土器拓影図(2)



第94図 造構外出土器拓影図(3)



第95図 造構外出土土器拓影図(4)

(2) 石器

D区遺構外より出土した石器は多種多様に及ぶ。剝片石器5種526点、礫石器178点の計704点である。剝片、礫石器の遺構外出土分布を観察すると、YK、YL-90グリッドに集中し、大概土器分布と一致する。石器の分類については報告書(2)を基本とした。なお遺構外及び遺構ごとの出土一覧は第4表の通りである。

石器 (第96図1~41)

140点出土した。YK、YL-90グリッドに43点と集中する。完形品は全体の5割強を占める。欠損品は茎部を欠くものが多い。形態からⅢ群7類に分類された。

I群…無基石鎚で、基部形態から3類に細分される。

a…平基・円基石鎚で、10点出土した。法量は長さ1.9~2.6cm、重さ0.5~2.7gを計る。平基鎚は五角形に近い形状を呈し、調整もていねいである。円基鎚は調整がやや粗く、側縁は曲線を画いている。(4~8)

b…凹基石鎚で、3点出土した。法量は長さ1.7~1.9cm、重さ0.4~0.7gを計り、軽量なものが多い。基部のえぐれが深いものと浅いものがあり、側縁はわずかに曲線を画いている。(1~3)

c…尖基石鎚、いわゆる柳葉形石鎚と呼ばれているもので、9点出土した。法量的にばらつきがみられ、長さ1.7~5.9cm、重さ0.4~8.3gを計る。形態的に基部付近が太くなるものと器中央が脹らむもののがみられる。後者は器中央に一次削離面を残すものが多く断面形が凸レンズ状を呈し、側縁の調整もていねいである。前者は断面形が菱形を呈する。

	石無石鎚	石匙	圓状石器	溝器	磨石斧	石錐	瓦石	石皿	磨石	敲石	半円状打製石器	三脚石器		計
SX(S)	4				7	1	4	4	1	2	3			26
S B Pit群	2		1		3	2	3	2			2			15
S B 塵穴					3			1			1			5
S X(O)														0
S X(F)	2				4									6
ST	3				11	1	1	1						17
SK(T)														0
SK(F)	1	2	3		28	1	3	3	2	4	2			49
SK	13	4	1		15		2	5	1	6	2			49
遺構外	140	19	24	8	335	30	19	43	14	49	17	5	1	704
計	165	25	29	8	406	35	32	59	18	61	26	6	1	871

第4表 出土石器一覧表

アスファルトの付着するものが2点存在する。(9~11)

II群…茎を有するもので、基部の形態から3類に細分される。

a…平基有茎石錐で、38点出土した。法量は長さ1.7~3.0cm、重さ0.3~2.3gを計る。

ていねいな押圧剝離により調整される。アスファルトの付着するものが2点存在する。

(27~29、31~40)

b…凹基有茎石錐で、46点出土した。法量は長さ1.5~2.7cm、重さ0.3~1.4gを計る。

基部のえぐれが深いものと浅いものがみられ、えぐれの深いものは側縁部が丸みを帯びるものが多い。アスファルトの付着するものが8点存在する。(22~25)

c…凸基有茎石錐で、23点出土した。法量は長さ1.7~4.2cm、重さ0.4~3.3gを計り、

ばらつきがみられる。茎が大きく突出するものと、極めて小さい突起状のものがある。

アスファルトの付着するものが7点存在する。(12~21、38)

III群…石錐の側縁部にえぐれを入れて凸状の茎を作りだしているもので、「アメリカ式石錐」と呼ばれているものに酷似する。法量は長さ2.0cm、重さ0.8gを計る。石材は硬質頁岩である。(41)

石錐に使用される石材は硬質頁岩が104点と多く、珪質頁岩、石英閃綠玢岩が続く。

石錐 (第96図42~59)

19点出土した。YK、YL-90グリッドから全体の4割程が出土した。形態から2分類された。

I群…つまみ部と錐部の境が明瞭でなく、V字状を呈するものである。14点出土した。側縁にていねいな調整を施すが、器中央に一次剝離面を残すものが多い。(42~49)

II群…つまみ部と錐部の境が明瞭で、T字状を呈するものである。5点出土した。つまみ部は一次剝離面を残すものが数例みられるが、錐部は精巧につくられる。(55~59)

法量は長さ2.8~6.5cm、重さ1.5~35.5gを計る。II群のものが法量的にまとまる傾向をみせる。石材は硬質頁岩が15点と多く、蛋白石、珪質頁岩、石英粗面岩が続く。

石匙 (第97図60~82)

24点出土した。202号環状配石遺構付近のグリッドからの出土が多い。つまみ部の作り出される位置からII群4類に分類された。

I群…つまみ部が刃部に対して平行に作りだされるもので、縦形石匙と呼ばれるものである。

これらは主要刃部の位置から、さらに3細分された。

a…左側縁に刃部が作られるもので、5点出土した。(63、68、69、74、78)

b…右側縁に刃部が作られるもので、10点出土した。(60~62、64、65、67、70)

c…両側縁に刃部が作られるもので、3点出土した。(66、71、75)

II群…つまみ部が刃部に対して直交するもので、横形石匙と呼ばれるものである。1点出土

した。 (77)

I群を観察すると、縦長剝片を使用している。刃部は押圧剝離により施されており、器中央に一次剝離面を残すものが多い。刃部角度は30~50度付近に集中する。法量は長さ4.3~8.3cm、重さ4~33gを計る。つまみ部にアスファルトが付着するものが5点存在する。I・II類とも使用されている石材は硬質・珪質頁岩である。81は「刈また」状を呈するもので、小さなつまみ部をもつ。石材は黒曜石である。

笠状石器 (第97図83~89、98図90、91)

9点出土した。すべて遺構外からである。平面形態で2分類された。

I群…基部に対して、刃部の幅が広くなるもので、8点出土した。(83~90)

II群…基部から刃部にかけて寸胴なもので、1点出土した。(91)

これらは法量的に2分できる。小型のものは主要面、背面に剝離調整を施すが、器中央に一次剝離面を残している。横断面は凸レンズ状を呈する。大型のものは背面全体に剝離調整を施すもので、主要面には大きな一次剝離面を残す。横断面はカマボコ状を呈する。法量は長さ3.5~7.2cm、重さ5.5~38g。使用される石材は硬質頁岩が多く、蛋白石、珪質頁岩が続く。

搔器 (第98図92~131)

出土した石器中最多く335点を数える。調査区全域に分布するが、YK、YL-90、YF、YG-90グリッドから多量に出土している。刃部の作り出される位置から4分類することができた。

I群……刃部が左、右、下側縁に限定されるもの (92~106)

II群……刃部が2側縁に及ぶもの (107~113)

III群……刃部が3側縁に及ぶもの (113~124)

IV群……刃部が側縁全域に及ぶもの (125~131)

搔器としたものは、これまで不定形石器と呼ばれているものを一括した。刃部は搔くのに都合のよいように鈍角に調整されるものが多い。法量は長さ2.1~10.2cm、重さ1.5~87.4gを計る。I~III群は形態、法量などばらつきをみせるのに対し、IV群は形態が円又はタマゴ形を呈するものが多く、長さも3cm前後に集中し、規格化されている傾向が看取られる。石材は圧倒的に硬質頁岩が多く、珪質頁岩、蛋白石が続く。

磨製石斧 (第99図132~151)

30点出土した。完形品は3点で、欠損品は刃部を欠くものが多い。2分類された。

I群…擦切磨製石斧で1点出土した。擦切技法の痕跡を顕著に残すもので左側縁には製作時の溝が消しきれずに残存している。法量は14.2cm、重さ259gである。(140)

II群…定角式磨製石斧で29点出土した。側縁及び基部が研磨され、石斧器面との間に棱を作

り、断面が隅丸長方形を呈している。法量は完形品が少なく不明であるが、小型のもので長さ5cm程、普遍的なもので15cm程と思われる。なお刃部の欠損状態及び使用痕などから141、144はアクセス的使用、148はアッズ的使用と考えられる（137～151）。このほか本群には小型のものもみられ、のみ的な使用も考えられる（132）。

使用される石材は、石英閃綠玢岩、綠色凝灰岩、綠色凝灰質泥岩、綠色片岩、安山岩である。

石鍬（第100図152～164）

19点出土した。出土地点を観察すると、ZWライン以南に多くみられ、特に220号環状配石遺構からは5点出土している。

石鍬に使用される石は、長さ5.1～11.3cm大の扁平な川原石で、長軸側縁辺を打ち欠き、えぐれを作り出している。数例であるが自然の凹みを利用し、一方だけに打ち欠きを施すものも存在する。重さは41～302gを計り、大型のものと小型のものに区分できそうである。

石材は熱を受け変質しているものが多い。石英閃綠玢岩が15点と多く、凝灰質泥岩、軽石質凝灰岩、凝灰角礫岩各1点である。

凹石（第101図178～185）

43点出土した。調査区全域に分布する。平面形が円及び橢円形を呈する扁平な川原石を使用する。片面のみに凹みをもつものは少なく、両面に1～2個の凹みをもつものが多い。凹みはV字状、皿状を呈する。法量は長さ6.7～16.5cm、重さ130～1,250gを計り、10cm大で300～400gのものが多い。使用される石材は11種に及ぶ。石英閃綠玢岩が22点と多く、以下安山岩、變朽安山岩、流紋岩、石英安山岩、火山礫凝灰岩、軽石質凝灰岩、凝灰質砂岩、砂岩、チャート、粗粒玄武岩が続く。

磨石と併用するものや、石皿、磨製石斧破片の転用もみられる。

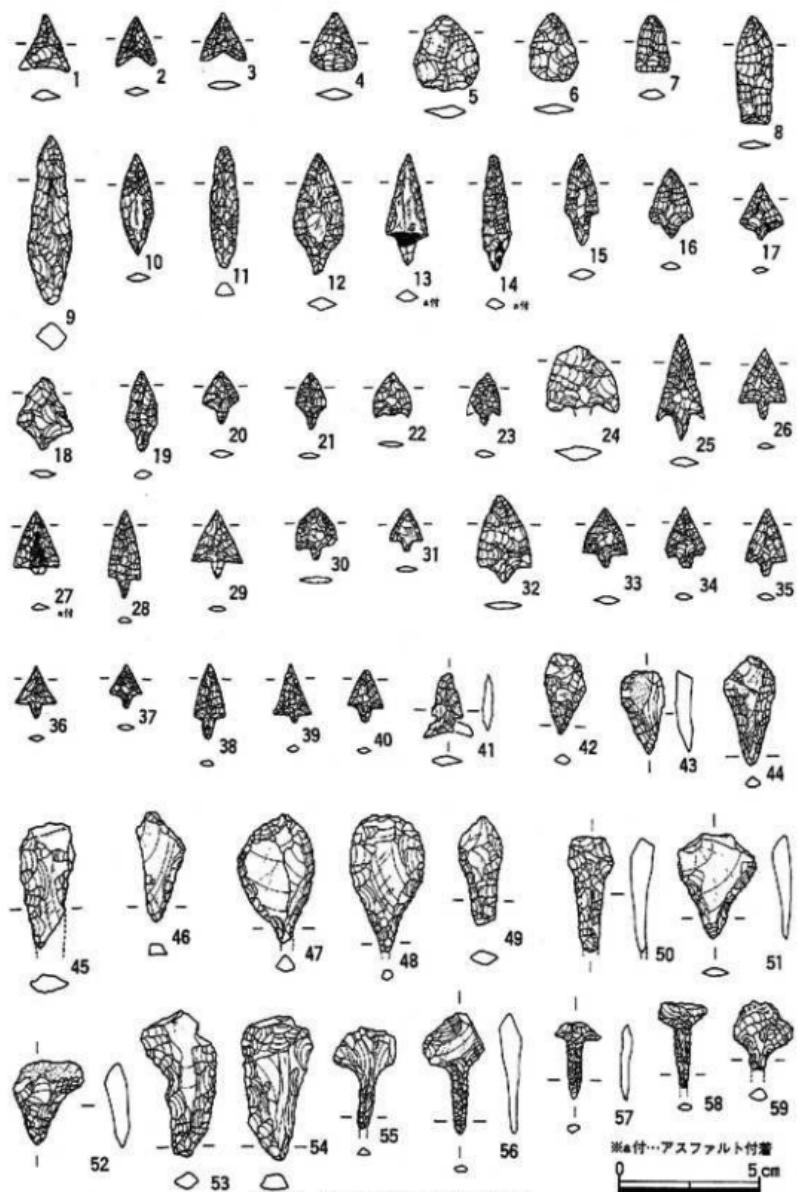
石皿（第102図194～196）

14点出土した。調査区北西端、中央部、220号環状配石遺構付近に集中する傾向がみられる。すべて欠損品である。形態から2つに分類された。

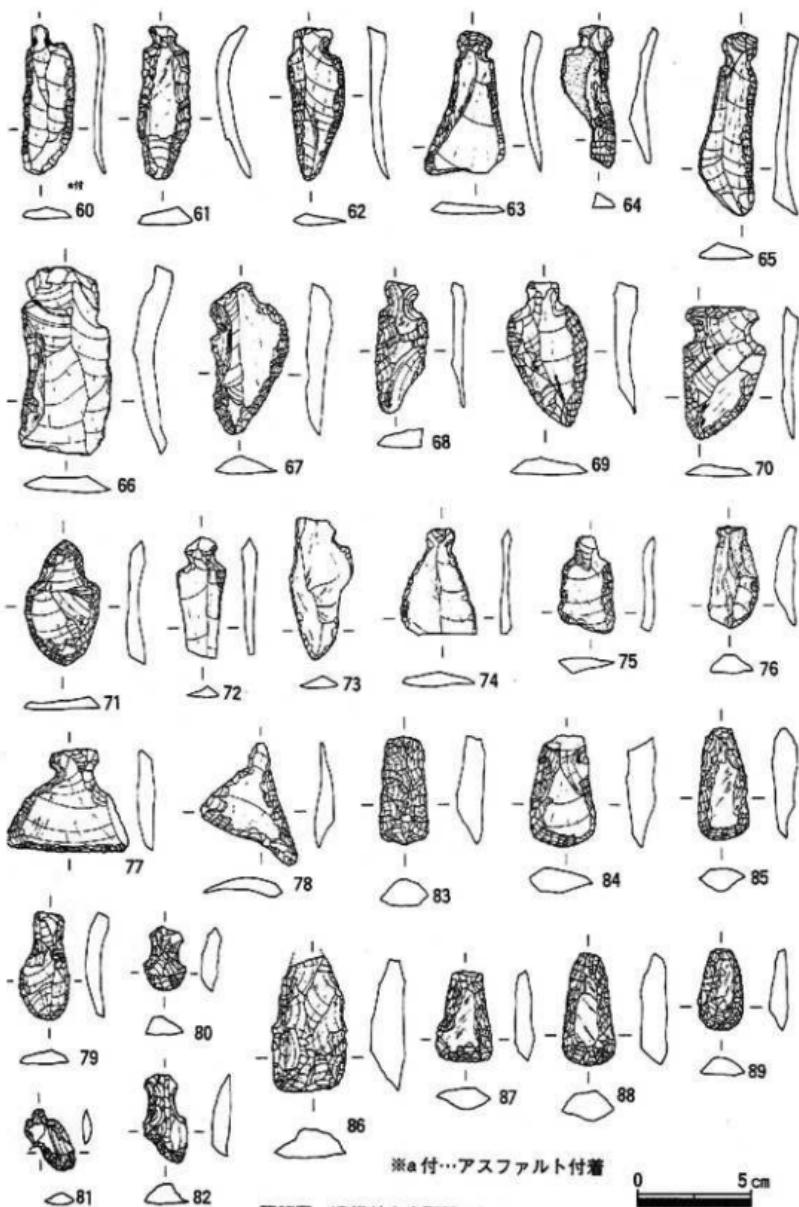
I群…やや大型で扁平な川原石の平坦な面を、浅い皿状にくぼめているもので使用面から縁辺部までの変化に乏しい。6点出土した。（195、196）

II群…やや大型の川原石を使用するもので、使用面と縁辺部が明瞭に区画されている。8点出土した。（164）

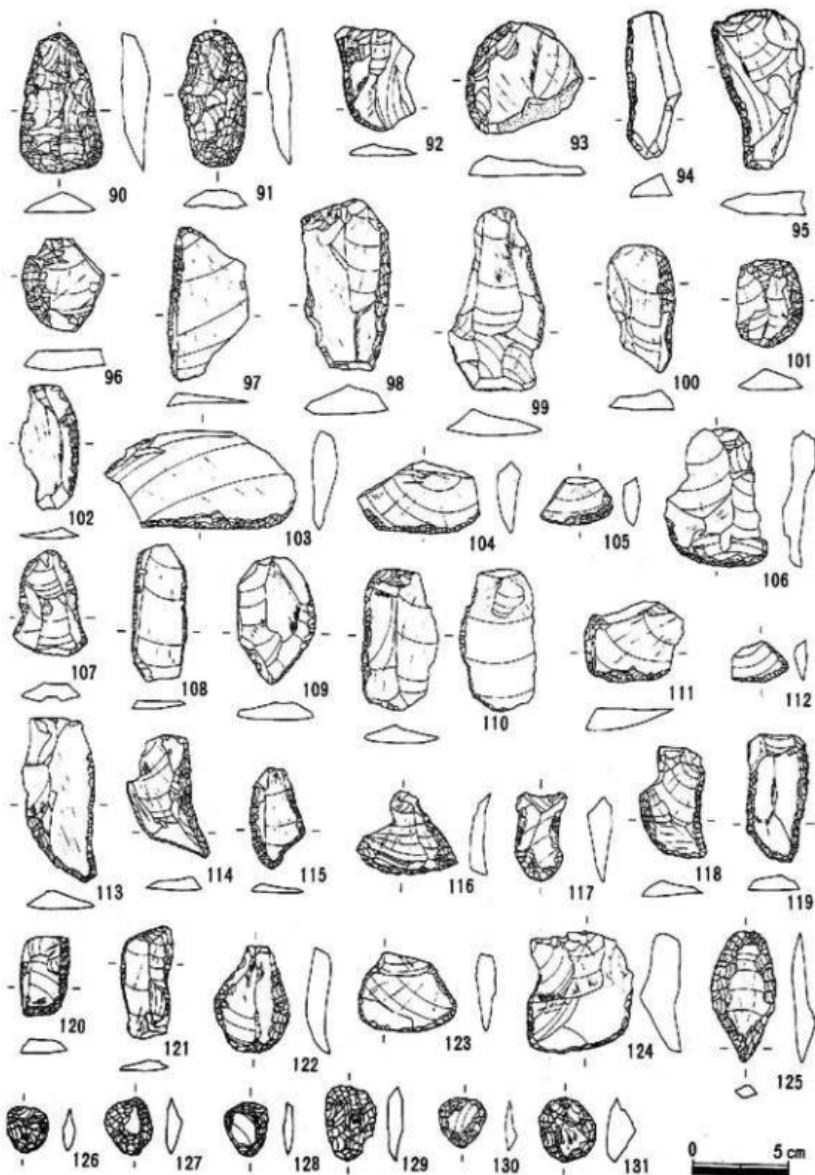
I群中には表裏面ともに使用されるものや砥石として併用されるものがある。II群の破損品を凹石に転用するものもある。使用される石材は凝灰岩が8点と多く、石英安山岩、石英閃綠玢岩、軽石質凝灰岩が続く。



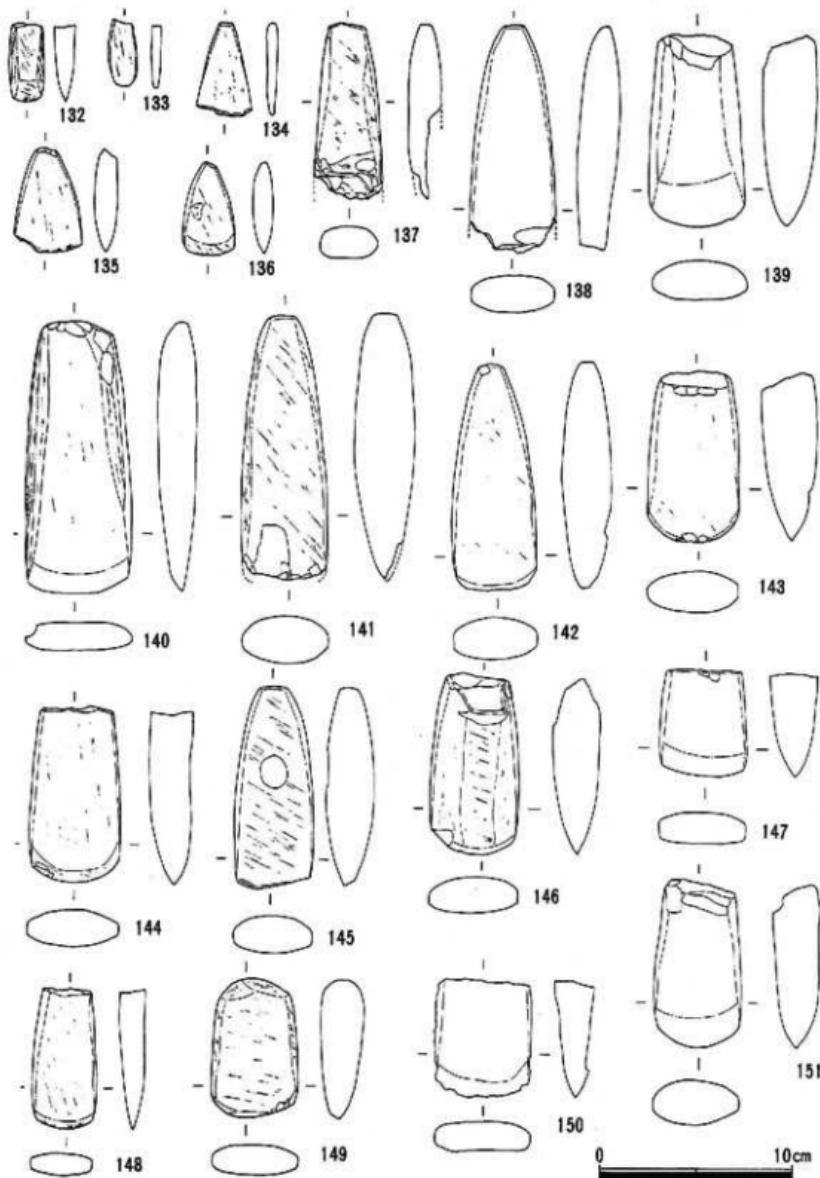
第96図 遺構外出土石器実測図(1)



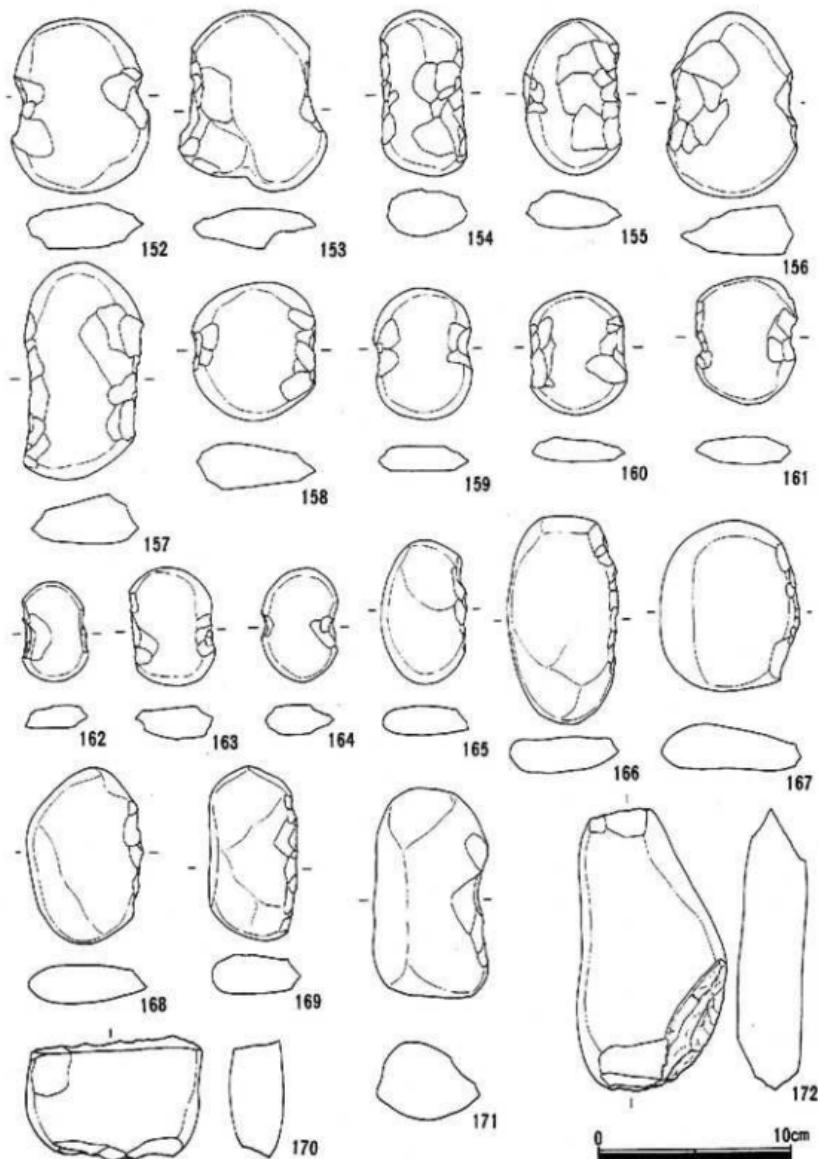
第97図 遺構外出土石器実測図(2)



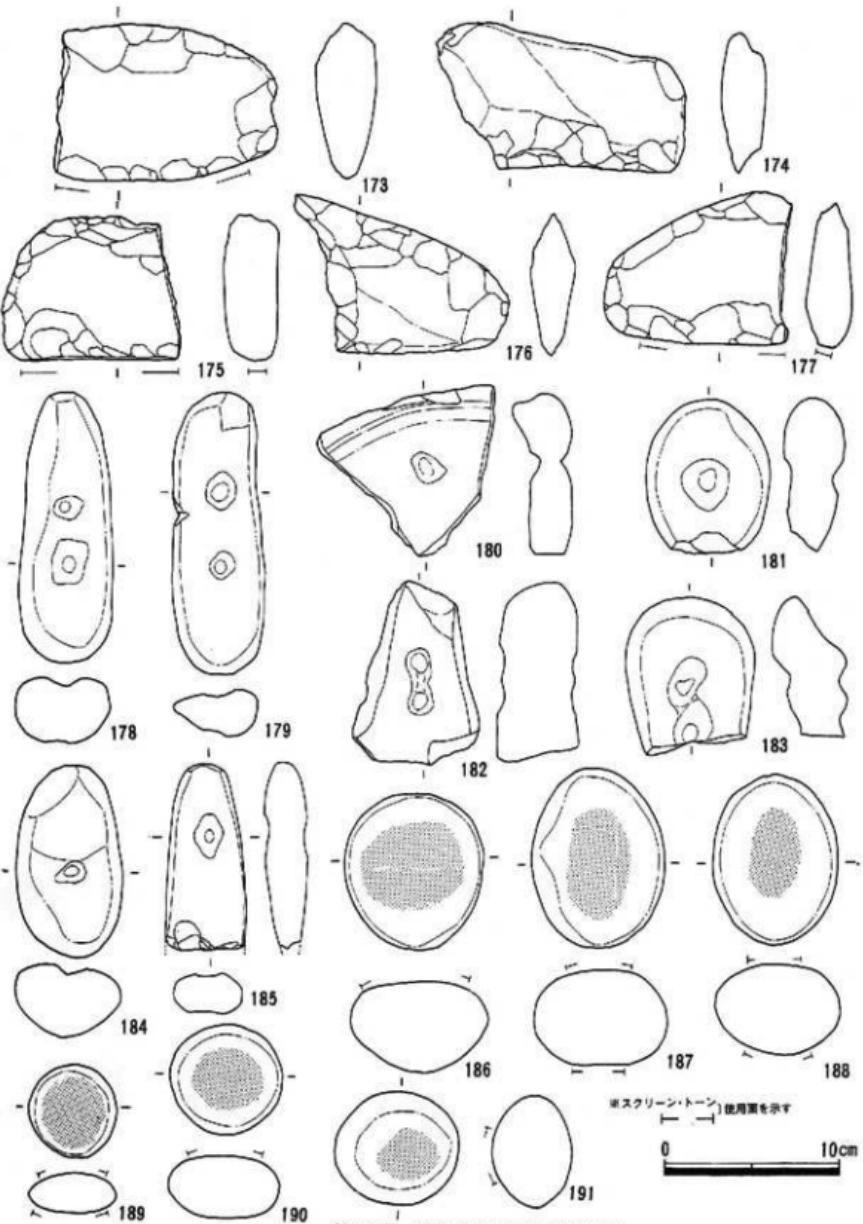
第98図 遺構外出土石器実測図(3)



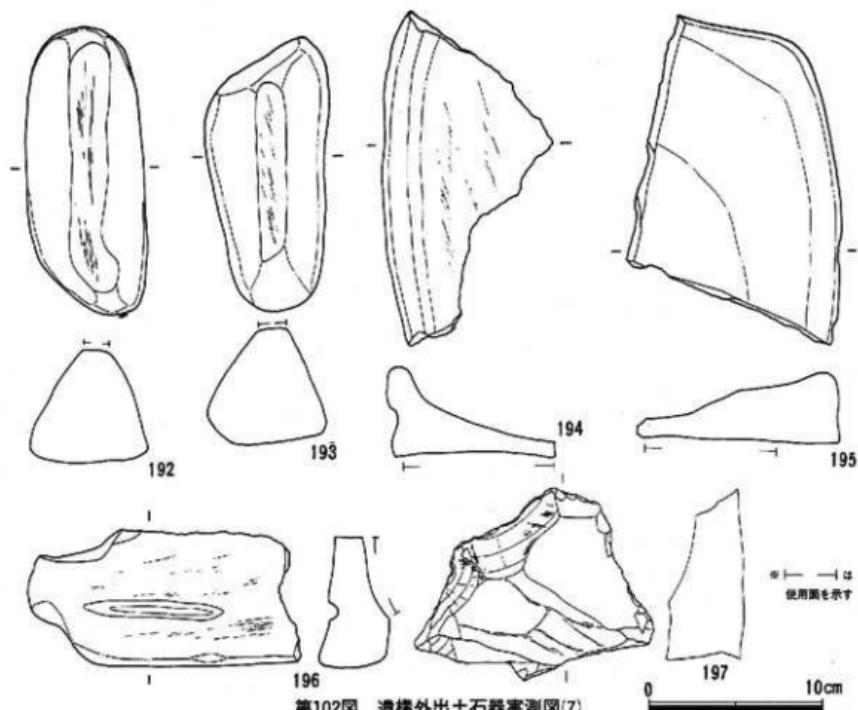
第99図 造構外出土石器実測図(4)



第100図 遺構外出土石器実測図(5)



第101図 遺構外出土石器実測図(6)
 - 139 -



第102図 遺構外出土石器実測図(7)

磨石 (第101図 186～191、102図 192、193)

49点出土した。出土地点は調査区全域に及んでいる。形態から2分類することができる。

I群…やや扁平な円錐の平坦部を使用面とするもので、使用面は表裏2面である。法量は長さ3.7～14.2cm、重さ20～1,390gを計る。長さ9cm程、重さ450g程のものに集中する傾向にある。(186～191)

II群…三角柱状のものが使用される。使用面は平坦な面に作られず、背稜部分を磨り減し使用面としている。法量は長さ15.2～20.9cm、重さ850～1,100gで、I群のものと比べ大形である。(192、193)

磨石に使用される石材は、石英閃緑玢岩が最も多く、以下安山岩、石英安山岩、凝灰岩が続く。

敲石 (第100図 165～172)

17点出土した。調査区南側にその多くが分布する。長さ5.1～14.6cm程の扁平な川原石の一側縁を打ち欠くもので、重さ36～445gを計る。石材は石英閃緑玢岩が圧倒的に多く、以下玄武岩、凝灰質泥岩が続く。

半円状扁平打製石器 (第 101 図 173 ~ 177)

5 点出土した。調査区中央部より北側に集中する。この分布は縄文時代前期の土器分布と一致する。長さ 7.4 ~ 8.9 cm、重さ 281 ~ 630 g ほどの扁平な石の一側縁に打ち欠き調整を施すものである。調整された側縁面中央部には自然面が残り使用面としている。

使用される石材は、石英閃緑玢岩、安山岩である。

その他の石器 (第 102 図 197)

三角形状を呈する石を用いる。一次調整は大きな剝離が施され、その後各側縁にこまかに調整を加えたもので、三脚石器に類似する。法量は 13.5 × 10.2 cm、重さ 550 g を計る。石材は硬質頁岩である。
(藤井安正)

(3) 土製品・石製品

D 区造構外より出土した土製品は、円盤状土製品 355 点、舞形土製品 16 点、葺形土製品 1 点、土偶 3 点、耳飾 4 点、土製装飾品 4 点、円形土製品 1 点、その他の土製品 2 点の計 386 点である。また石製品は、円盤状石製品 14 点、球状石製品 10 点、碗状石製品 1 点、石冠 1 点、石剣・石刀 3 点、石棒 1 点、有孔石製品 3 点、線刻彫 1 点、その他の石製品 6 点の計 40 点を出土した。

なお、遺構外及び造構ごとの出土一覧は第 5、6 表の通りである。

円盤状土製品 (第 104 図)

土器片を二次的に使用し、打ち欠き、研磨により円形、三角形、方形に整形しているものである。文様の有無、加工方法、形状を問わず多少彎曲しているものが多いのは、土器胴部片を多用しているためである。また赤色顔料及び茶褐色樹脂が付着しているものがある。

355 点の円盤状土製品を形状により次のように分類した。

I 類……円形を呈するもの —— 全体の 77.7% にあたる 276 点が出土した。

II 類……三角形を呈するもの —— 全体の 18.9% にあたる 67 点が出土した。

III 類……方形を呈するもの —— 全体の 3.4% にあたる 12 点が出土した。

種別	土偶	耳飾	土製装飾品	円盤状土製品	その他の土製品	計
SX(S)				4	4	
SX(D)				2	2	
SX(B)				27	1	28
SX(O)					2	
SX(F)				4	4	
ST	1	1	1	16	18	
SK(T)					3	
SK(F)		1	1	47	48	
SK			1	44	45	
遺構外	16	3	1	4	4	35
計	18	4	2	7	4	57

第 5 表 出土土製品一覧表

種別	刀	石	神石	冠	球	石器	三脚石器	碗状石器	圓形石器	遺構外	その他	計
SX(S)										2		2
SX(D)										1	1	2
SX(B)												0
SX(O)												0
SX(F)												0
ST												0
SK(T)												0
SK(F)										8	3	11
SK										1	5	6
遺構外	1	1	1	1	1	1	1	1	1	14	10	1
計	3	1	1	1	5	1	27	13	4	8	34	

第 6 表 出土石製品一覧表

加工方法により次のように分類した。

- a 類……全体及び一部を研磨加工しているもの —— 全体の50.1%にあたる178点が出土した。
- b 類……打ち欠き加工だけのもの —— 全体の49.9%にあたる177点が出土した。

形状と加工方法の関係は、Ia 140点、Ib 136点、IIa 31点、IIb 36点、IIIa 7点、IIIb 5点で、その数はほぼ同数となる。ただし、打ち欠き加工だけのものは判別しにくいものが多く、選別基準が曖昧なものとなる感は否めない。

文様は無文、沈線文、縄文、網目状撚糸文、磨消繩文が大部分を含め、撚糸文、網目状沈線文、隆沈文などが続く。文様による選別は認めにくく、文様と形状、加工方法の差異も認めがたい。当時使用されていた土器文様傾度が、そのまま反映されるのであろう。

大きさは、4cm前後ものが多い。

圓形土製品 (第103図13~28)

16点出土した。頂部の貫通孔の有無により次のように分類した。

- I 類……貫通孔を有しないもの (14、17、24~26)

開口部が円形を呈するもの (14、25) と楕円形 (17) を呈するものとがある。14は頂部に尾鱗状の突起が作り出されており、胴部には沈線による文様が施されている。17は頂部に突起はなく、無文である。大きさは14が推定開口部径3.7cm、高さ7.4cm、厚さ0.5cm、17が開口部径4.3×3.1cm、高さ5.8cm、厚さ0.4cmを計る。

- II 類……貫通孔を有するもの (13、15、16、18~23)

a) 開口部に垂直に穿たれているもの

造構外からの出土はないが、北西部柱穴状ピット群のピット404から1点出土した。開口部は円形を呈し、開口部径2.3cm、高さ3.8cm、厚さ0.3cmを計る。胴部には沈線による文様が施されている。

b) 開口部に平行に穿たれているもの (13、15、16、18~23)

開口部が円形を呈するものと楕円形を呈するものとがある。後者はさらに、開口部長軸に平行なもの (13) と、短軸に平行なもの (15、16) とがある。13は刺突による文様が施され、15、16は無文である。18は頂部に尾鱗状の突起を有する。大きさは13が開口部径3.8×2.6cm、厚さ0.5cmを計る。15、16はそれぞれ推定口徑4.2×3.1cm、5.2×2.9cm、高さ6.2cm、4.8cm、厚さ0.4cm、0.3cmを計る。

- III 類……胴部片で貫通孔の有無が不明なもの (27、28)

27は沈線と刺突により文様が施され、28は無文である。厚さは共に0.5cmを計る。

圓形土製品 (第103図29)

欠損品である。「かき」は内側に反っており、全体の断面形は「T」字形を呈する。高さは

3.2 cmを計る。「茎」は直立しており、径1.7 cm、高さ2.6 cmを計る。焼成は良好である。

土偶 (第103図10~12)

3点出土した。10、11は脚部及び胴下半部である。11はO脚状を呈し無文である。いずれも焼成は良好である。12は中空の腕部で、その両端に2~3条の沈線を巡らし、沈線間に刻みが施されている。腕の最大径は4.5 cmを計る。胎土には砂粒を多く含む。

耳飾 (第103図1~4)

4点出土した。1~3は耳栓である。凹部中央に貫通孔のあるもの(1、2)と、ないもの(3)とがある。大きさは表面径1.2~1.6 cm、耳朶孔径1.1~1.4 cm、側縁部厚0.8~1.1 cm、中心部厚0.3~0.4 cm、重さ1.5~2.5 gを計る。4は貫通孔を有し、側面は幾分張り斜位に沈線文が施されている。大きさは表面径1.6 cm、側縁部厚0.8 cm、重さ2.5 gを計る。1、4には赤色顔料が塗布されている。

土製装飾品 (第103図5~8)

耳飾も装飾品であるが、ここでは耳飾以外の土製飾品を一括した。

5はそろばんの玉のような形をしており、長軸方向に貫通孔が穿たれている。大きさは長さ1.6 cm、最大径1.3 cm、重さ1.5 gを計る。

6は三角形状を呈し、縦に孔が穿たれているが貫通していない。同タイプのものが遺構内より3点出土しており、全て横に貫通孔が穿たれている。

7は「X」字状を呈しやや扁平で、貫通孔が穿たれている。大きさは3.5×3.0 cm、厚さ0.8 cm、重さ5.5 gを計る。

8は欠損品で全体の形状は不明であるが、貫通孔が穿たれている。沈線と刺突により文様が施され、厚さ1.3 cmを計る。

円形土製品 (第103図30)

欠損品である。径3.6 cmの円形を呈すると考えられ、貫通孔が穿たれている。断面は橢円形を呈し、厚さ1.2 cmを計る。全面に刺突が施されている。

その他の土製品 (第103図9、31)

9は足先をやや尖らせたような形をしており、平坦面をもつ。焼成は良好である。

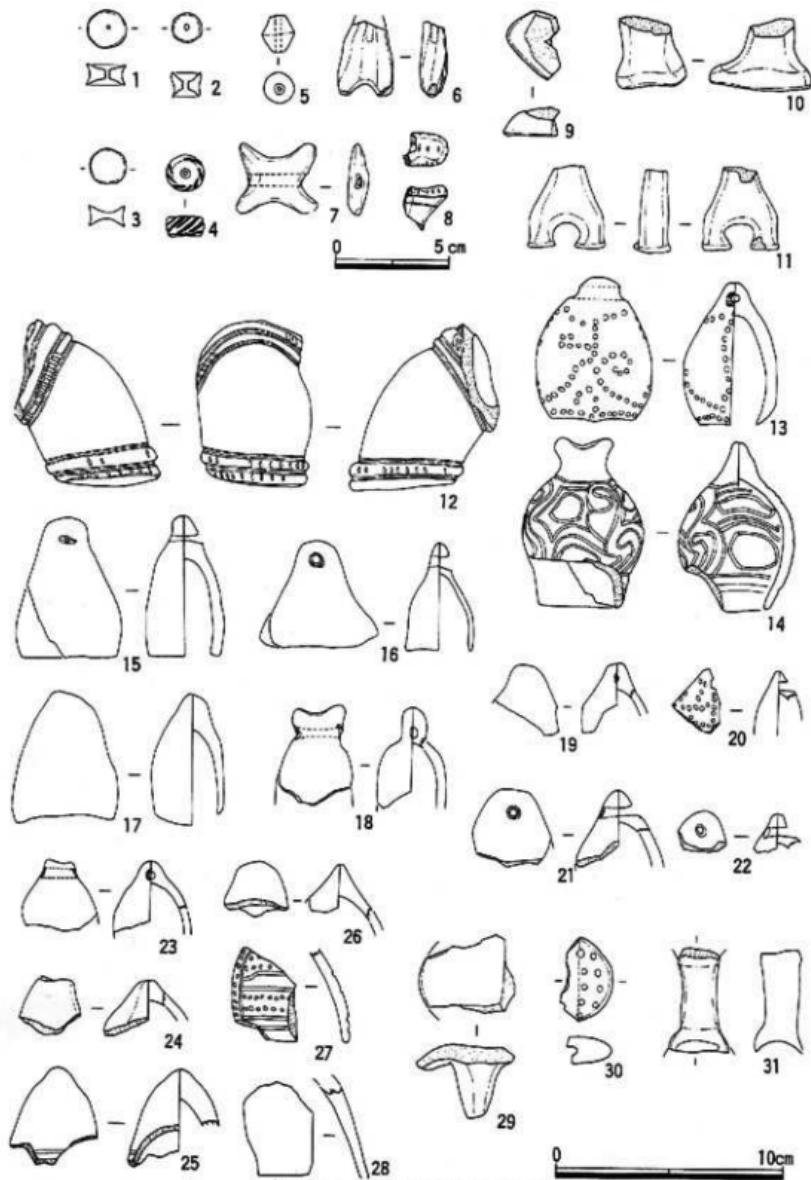
31は両端を欠損しており棒状部分と片側に椀状部分が若干残っているだけである。ワイングラスの脚のような形をしており、焼成は良好である。

円盤状石製品 (第105図4~17)

14点出土した。加工方法により次のように分類した。

I類……器面の一部及び全面を研磨加工しているもの

8点出土し、完形品は2点である。石質は軽石3点、凝灰質泥岩3点、石英閃綠玢岩1点、



第103図 遺構出土製品実測図(1)



第104図 遺構外出土土製品実測図(2)

泥質凝灰岩 1 点である。

II類……打ち欠き加工だけのもの

6 点出土し、完形品は 3 点である。石質は全て石英閃綠玢岩である。

I類は軟質の石材が多く、II類は硬質の石材が使用されており、加工方法は石材によるところが大きいと思われる。また熱により変質しているものが 4 点出土しており、石質は全て石英閃綠玢岩である。大きさは径 4~5 cm、厚さ 1 cm 前後が多い。

球状石製品 (第 105 図 18~27)

10 点出土した。全面を研磨して球状に整形しており、1 個の凹部をもつが、凹みの大きさはさまざまである。大きさは最大のものが径 6.3 cm、高さ 4.7 cm、最小のものが径 3.0 cm、高さ 2.4 cm である。重さは最大が 100 g、最小が 17.5 g を計る。石質は軽石が 6 点、泥質凝灰岩 2 点、凝灰質泥岩 1 点、泥岩 1 点である。

碗状石製品 (第 105 図 28)

平面形は円形で、断面はやや扁平な碗状を呈し丸底である。凹部一面に褐色の付着物がみられる。大きさは径 9.3 cm、高さ 3.6 cm、重さ 337.6 g を計る。石質は泥質凝灰岩である。

石冠 (第 106 図 35)

完形品である。全面を研磨によって整形している。正面、側面が頭部から基底部まで一体となり、側面は三角形状を呈する。底面はほぼ平坦で長方形を呈する。正面にはそれぞれ 1 個の凹みをもち、また底面にも 2 個の凹みをもつ。大きさは 8.6 × 3.9 cm、高さ 6.1 cm、重さ 318 g を計る。石質は石英閃綠玢岩である。

石劍・石刀 (第 106 図 37~39)

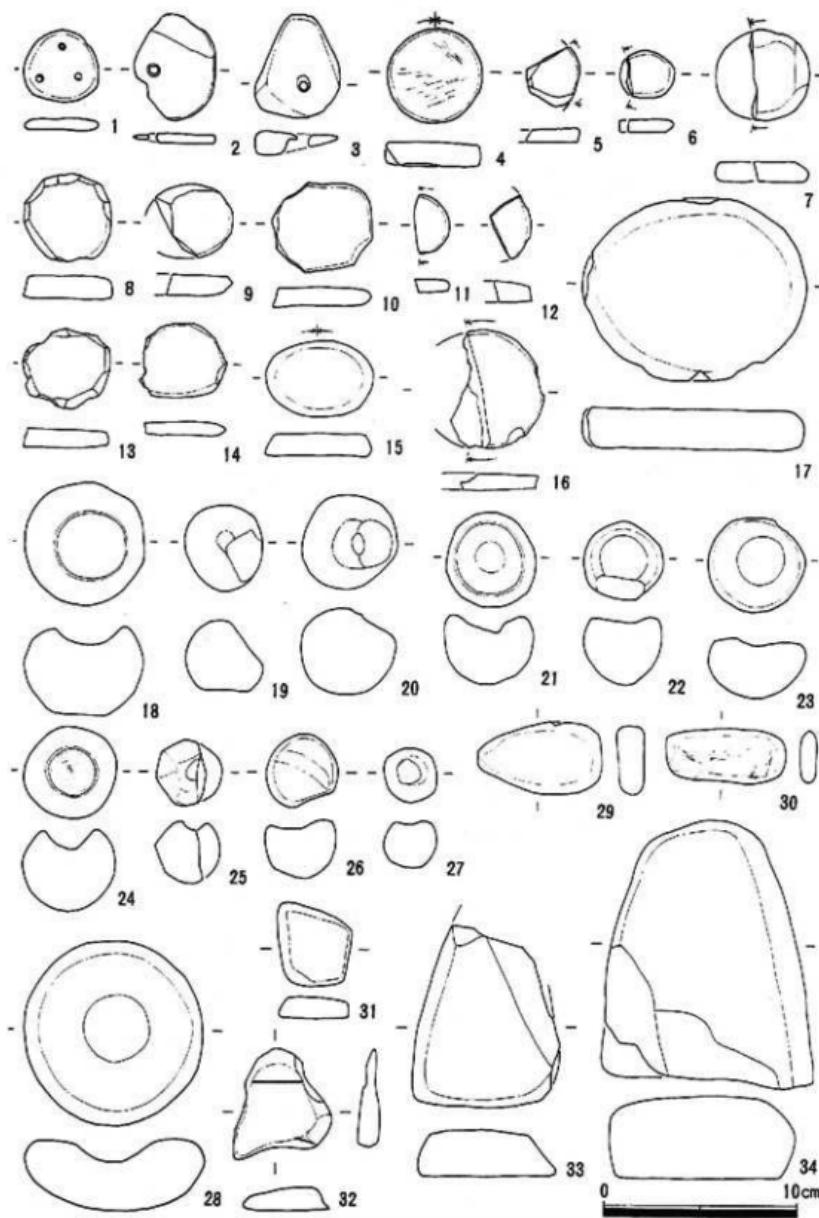
3 点出土した。いずれも欠損品で 37、39 は丹念な研磨によって仕上げられている。37 は内反りで、身の断面が楔形を呈しており、背は平坦で幅 0.2 cm の溝が鋒まで入れられている。現存長 19.1 cm、幅 3.3 cm、厚さ 1.3 cm を計る。38 は現存長 17.6 cm、幅 5.7 cm、厚さ 1.9 cm を計る。石質は 37、39 が粘板岩で、38 は石墨変岩である。

石棒 (第 106 図 36)

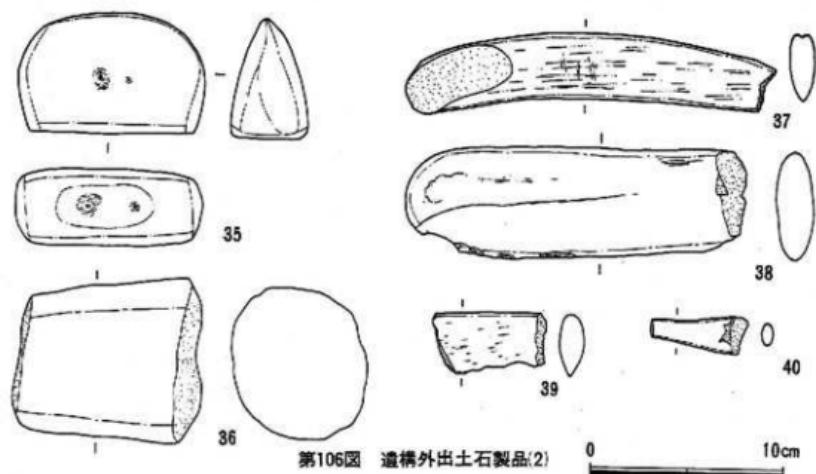
欠損品である。断面は円形を呈し、最大径 8.5 cm を計る。石質は石英安山岩である。

有孔石製品 (第 105 図 1~3)

3 点出土した。全て扁平で全面が研磨されている。1 は円形に近い三角形状を呈し、大きさは 3.9 × 3.7 cm、厚さ 0.6 cm、重さ 7.6 g を計る。各頂点に 1 個ずつ、計 3 個の貫通孔が穿たれている。また頂点と対辺に 1 個ずつかすかな刻みが見られる。完形品である。2、3 は 1 個の貫通孔をもち、厚さは 2 が 0.5 cm、3 が 1.3 cm を計る。石質は 1 が凝灰質泥岩、2 が硬質頁岩、3 が軽石である。



第105図 遺構外出土石製品実測図(1)



第106図 遺構外出土石製品(2)

線刻機 (第105図32)

全面を研磨しているが全体に雑な整形である。直線状の線刻がなされており、何かを具象化しているように見える。石質は凝灰質泥岩である。

その他の石製品 (第105図29~31、33、34、106図40)

29~31、33、34は全面を研磨した扁平な石製品である。29は三角形状または舟形状を呈し、30は長楕円形を呈する。29は頂部に、30は長軸一端にそれぞれ敲打痕が見られる。大きさはそれぞれ6.3×3.6 cm、6.2×2.2 cm、厚さ1.3 cm、0.9 cm、重さ33.0 g、24.8 gを計る。33、34は三角形状を呈し、大きさは34が13.2×10.5 cm、厚さは34が4.2 cm、33が2.4 cmを計る。石質は29が泥質凝灰岩、30が凝灰質泥岩、31、33、34が蛭石である。

40は両端を欠損しており全体の形状は不明であるが、残存部は扁平な三角形状を呈する。丹念な研磨によって仕上げられており、厚さは0.6 cmを計る。尖部側には紐状のものを巻付けた痕が見られる。石質は粘板岩である。

(佐藤 樹)

第IV章 D区の歴史時代の遺構と出土遺物

D区において確認された歴史時代の遺構は、竪穴住居跡3棟、土壙3基で、調査区中央部から北西側（台地縁辺）にかけて分布している。

1. 竪穴住居跡

第201号竪穴住居跡 (第107、108図、111図1~9、PL11, 27)

調査区のはば中央、Y H-92、93、Y I-93グリッドに位置する。Ⅲ層上面において浮石粒

を混入する黒色土の方形プランと、これに付設されたカマド煙道部を確認した。なお本住居跡北側一部は未発掘である。規模は南壁長5.09m、西壁長5.19m、北・東壁長は検出されているだけで各々3.76m、1.88m、底面積は推定で25m²を測る。主軸方向はN-24°Wである。壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がり、壁高は南壁59~63cm、西壁62~68cm、北壁59~62cm、東壁57~63cmを測る。底面は、ほぼ全域に貼床が施されており、極めてゆるやかな起伏がみられ、特に南側半分は堅く踏みしめられていた。床面に10個のピットが確認された。その内柱穴となり得るのは、各隅部のピット1~3と、各隅部ピット間を三等分するように配置されたピット4~8である。壁溝は、カマド部分を除き、各壁に沿って存在する。その上幅は10~15cm、深さ7~11cmを測る。この壁溝のほか、床面を二分するように東西方向に設定された上幅13~16cm、深さ3~6cmの間仕切り的要素の強い溝が検出された。またピット9とその際より延びる溝が存在する。堆積土は自然堆積で、9層に分層され、浮石粒の混入がみられた。

カマドは、南壁中央部より西寄りに構築されている。本体は20~45cm大の柱状や扁平な石を袖部及び天井部の芯材とし、粘土を貼りつけている。煙道部は確認状況などから半地下式のものと考えられる。

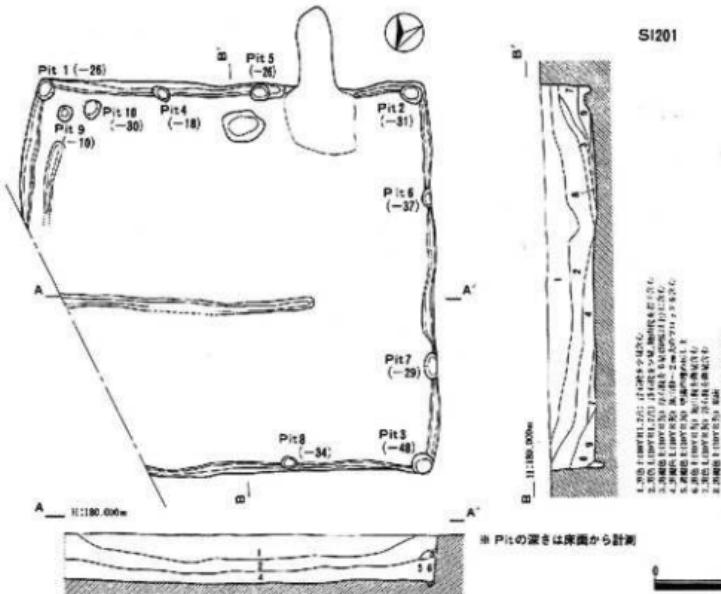
遺物は底面付近やカマド内より少量の變形土師器破片、鉄滓1点出土した。復元できたものは1点(111図1)で、器高12.4cmを計る。外面は泥なし、内面は横位の指なでが施される。色調はにぶい橙色を呈する。2、3は底部で砂粒の付着(砂底)と木葉の圧痕がみられる。4~9は口縁部破片で、外面に篦削り、なで、内面に篦なでがみられる。

本住居の時期は、堆積土混入物である浮石粒から、大湯浮石降下以後、平安時代後半と考える。

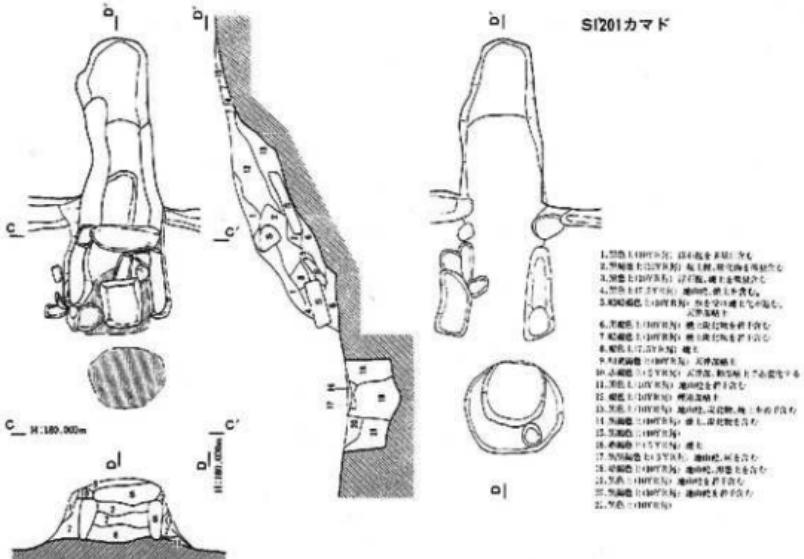
第202号竪穴住居跡 (第109図、111図10)

調査区北端部、YL、YM-94グリッドに位置し、IIIa層上面において浮石粒を含む黒色土の落ち込みを確認した。本住居は調査対象区外に接すことなどから、一部を調査したに過ぎない。住居跡の平面形は、確認した部分から判断して方形を呈するものと考えられる。確認部分は北西隅を中心として、西壁長4.53m、北壁長1.25mである。V層中位を底面とする。底面は部分的に貼床が施されており平坦な感じを受け、堅く踏みしめられていた。壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がり、壁高は北壁84cm、西壁73~81cmを測る。柱穴は北西隅と西壁に各1個が確認された。壁溝は北・西壁に沿ってみられ、上幅10~16cm、深さ1.5~4cmを測る。堆積土は自然堆積で11層に区分され、いずれにも浮石粒の混入がみられた。

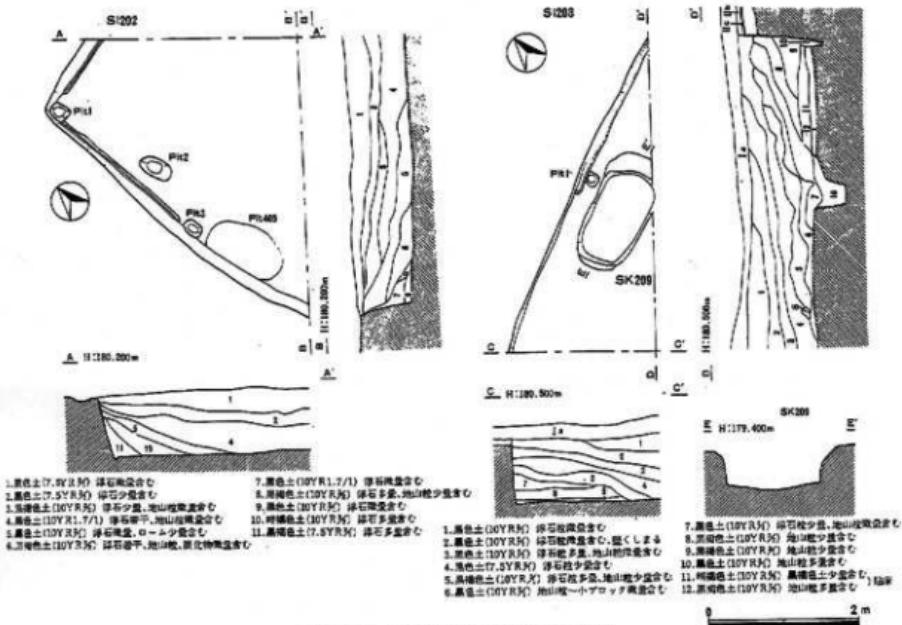
遺物は極めて少なく、復元、図化できたものは土師器壊1点(111図10)だけで、他は變形土師器片である。10はロクロから回転糸切り技法で切り離されたもので、内面は黒色処理後、底部中央から放射状に細かい篦磨きが施されるものである。色調は橙色を呈する。底径5.3cmを計る。



第107図 壇穴住居跡実測図(1)



第108図 壇穴住居跡カマド実測図



第109図 穴住居跡・土壤実測図(2)

本住居跡の時期は、堆積土より大湯浮石降下以後、平安時代後半と考えられる。

第203号穴住居跡（第109図、111図11）

調査区北西端、Y K-90グリッドに位置する。II層（大湯浮石層）上面において確認した。本住居跡は、調査対象区外と接することや、土砂置き場をこの付近に設定したことから全容を表わすまでは至っていない。検出された住居跡は北壁の一部で、平面形、規模を推定できるものではない。V層中位を底面とし、東側に貼床が施される。底面は西側へ向かって傾斜し、堅く踏みしめられていた。壁は底面から垂直に立ち上がり、壁高90~93cmを測る。壁際は北壁沿いにみられ、上幅5~8cm、深さ4~16cmを測る。柱穴は北壁沿いに1個が確認された。堆積土は自然堆積で、9層に分層された。

遺物は極めて少なく、図化できたのは壺形土師器1点（111図11）である。底部付近にわずかに残る調部には底削りが施されている。色調はにぶい黄褐色、底径7.2cmを計る。

本住居跡の時期は、大湯浮石降下以後、平安時代後半と考えられる。

なお、本住居跡底面において209号土壠を確認した。住居跡堆積土と一連の土砂が流れ込んでいることから本住居に伴った施設と考えられる。

2. 土 壤

第207号土壤 (第110図)

調査区中央、Y G-92グリッド、Bc層上面において大湯浮石粒を含む黒色土の落ち込みを確認した。本土塙東側に208号土壤が隣接する。平面形は梢円形を呈し、径90×81cm、深さ15cm、底面積0.42m²を測る。長軸

方向はN-17°-Wである。土壤の握り込みは浅く、Bc層を底面とする。底面は平坦で、軟弱である。壁はやや外傾して立ち上がる。堆積土は單一層で、自然堆積である。

遺物は出土しなかった。構築時期は堆積土から大湯浮石降下以後と考えられる。

第208号土壤 (第110図)

調査区中央部、Y G-92、93グリッドに位置する。Bc層上面で大湯浮石粒を含む黒色土の落ち込みを確認した。本土塙西側に207号土壤が隣接する。平面形は梢円形を呈し、径165×149cm、深さ64cm、底面積1.63m²を測る。長軸方向はN-29°-Wである。V層中位を底面とする。底面には小さな起伏がみられるが巨視的にみると平坦な感じを受け、堅くしまる。壁は底面よりやや外傾して立ち上がる。堆積土は18ブロックに区分され、人為堆積である。

土壤内より、土師器破片が出土した。構築時期は大湯浮石降下以後の平安時代後半と考えられる。

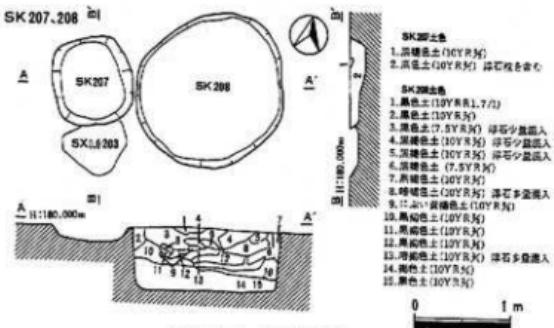
第209号土壤 (第109図)

調査区北西端、Y K-90グリッドに位置する。203号住居跡調査中床面において確認した。平面形は梢円形を呈し、径164×78cm、深さ60cm、底面積0.73m²を測る。長軸方向はN-65°-Eである。V層下位を底面とし、平坦で堅くしまる。壁は底面より外傾して立ち上がる。堆積土は203号住居跡堆積土が流れ込んでいた。遺物は出土しなかった。構築時期は203号住居跡と同時期と考えられる。

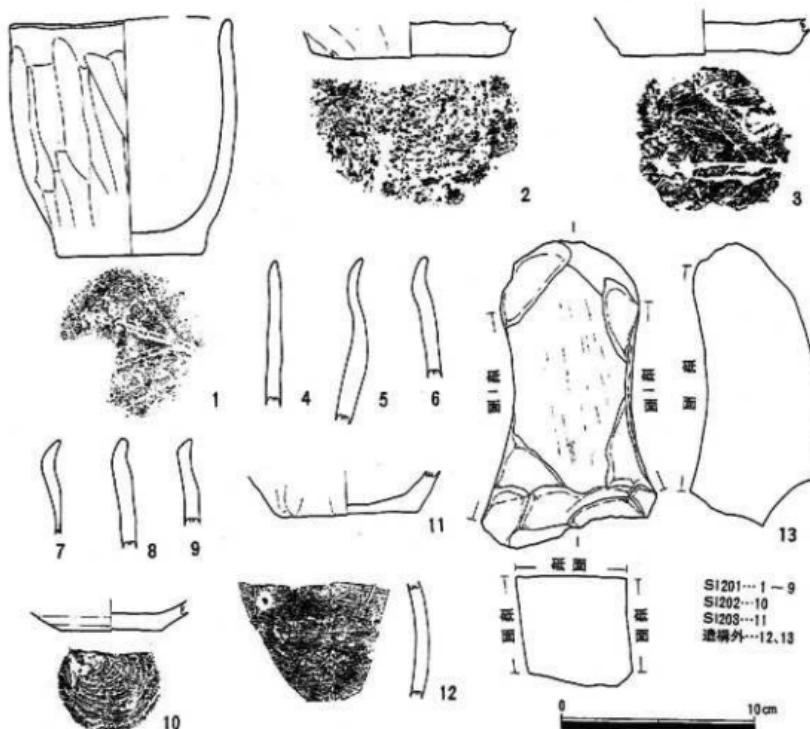
3. 遺構外出土遺物 (第111図12、13)

遺構外より出土した歴史時代の遺物は極めて少なく、須恵器1点、砥石1点である。

須恵器は、壺形須恵器の腹部破片で、外面に蒐削り、内面に蒐なでが施される。色調は灰色を呈する。砥石は、最大長14.7cm、重さ1,090gで、砥面3つをもっている。石材は硬質頁岩である。(藤井安正)



第110図 土壠実測図



第111図 壁穴住居跡出土土器、造構外出土遺物実測図

第V章 E区の検出遺構と出土遺物

E区から検出された遺構は、土壙1基である。また、土器片11点、石器3点が出土した。

1. 土 壙

第301号土壙 (第112、113図)

発掘区西端9ライントレーナーのZD-9グリッドに位置し、IV層下面で確認した。平面形は $177 \times 106\text{cm}$ の楕円形を呈し、深さ84cm、底面積 1.92m^2 を測る。底面はVI層より成り、平坦でやや軟弱である。壁は堅く直線的である。堆積土は9ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。遺物は北西壁際土壙下位より、 $23 \times 12\text{cm}$ 大の自然石が出土しただけである。

2. 遺構外出土遺物

(1) 土 器 (第114図)

1は連鎖状撚糸文を施した深鉢調部片で原体はR縄文である。2はR.L縄文を施した深



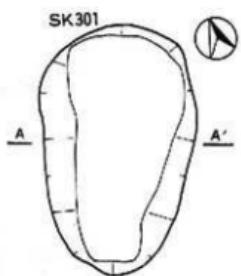
第112図 E区グリッド配置図・造構配置図

鉢形部片である。3、4は同一個体と考えられる鉢形土器で、沈線による橢円形文、曲線文が施され刺突が施されている。口縁部付近に隆帯が張り付けられている。5は無文の底部付近の破片である。
1、2、5は縄文時代後期、
3、4は縄文時代後期前葉と
考えられる。これらの土器は
Z K-26、41、Z Q-9グリ
ッドからの出土である。

(2) 石 器 (第115図)

1、2は搔器である。剥片側縁部に刃部調整を施している。3は磨石で全面を使用面としている。大きさは5.3×4.6cm、厚さ3.5cmを計る。石質は1が硬質頁岩、2が黒色頁岩、3が石英閃緑玢岩である。1はZ L-9グリッド、2はZ N-13グリッドからの出土である。

(佐藤 樹)



第113図 土壌実測図

0 1m



第115図 造構外出土石器実測図

0 10cm

第VI章 自然科学的調査

1. 大湯環状列石周辺遺跡出土火山灰、粘土、縄文土器の蛍光X線分析

奈良教育大学教授 三辻 利一

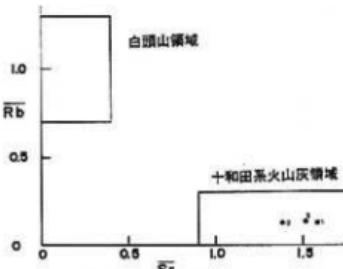
(1) 火山灰

東北地方北部の平安時代に対比される遺跡の地層からは蛍光X線分析によって2種類の火山灰が検出されている。一つはその($Rb-Sr$)特性が十和田系火山灰と同じであり、十和田火山活動の最後の爆発に伴う十和田a火山灰である。この火山活動は扶桑略記によると、延喜15年(西暦915年)である。一方、他の一つの火山灰は($Rb-Sr$)、(K-Ca)特性が十和田系火山灰とは全く異なり、K、Rbリッチの火山灰である。このような特性をもつ火山灰は東北地方は勿論、日本列島の他の地域でも検出されてはいない。地質学者によると、この火山灰は北朝鮮と中国の国境にある白頭山の大爆発による火山灰が偏西風に乗って、東方の東北地方北部から北海道南部地域にかけて降灰した、所謂、広域火山灰であると言われている。この2種類の火山灰は蛍光X線分析によって容易に識別される。また、前者の落灰が915年であるのに対し、後者は10世紀末と言われており、その年代差は百年とは隔たってはいない。そのため、遺跡に堆積するこれらの火山灰を上手に活用すれば、東北地方北部地域の遺跡から出土する須恵器の編年、その他流逝の問題を解明していく上にはきわめて面白い存在となる。

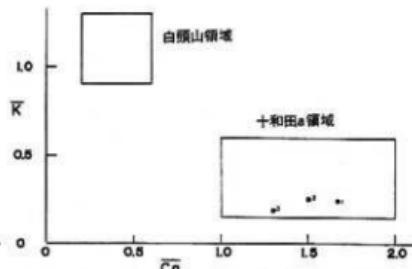
今回は大湯環状列石周辺遺跡から出土した火山灰の分析結果について報告する。

データ解析は作図法で行った。分布図上で全因子で十和田a火山灰に対応した場合に十和田a火山灰と判定した。

第116図には大湯環状列石周辺遺跡に堆積する火山灰のRb-Sr分布図を示す。この図にはこれまでに分析されている多数の十和田系火山灰、白頭山火山灰の全分析値を包含するようにして



第116図 大湯環状列石周辺遺跡出土火山灰のRb-Sr分布図



第117図 大湯環状列石周辺遺跡出土火山灰のK-Ca分布図

両領域を設定してある。そうすると、No 1、2、3 の火山灰は3点とも十和田系火山灰領域内に分布することがわかる。

第117図にはK-Ca分布図を示す。K-Ca分布図では十和田系火山灰の中でも、十和田a、十和田b、二ノ倉火山灰などは少しずつずれて分布する。第117図より、No 1、2、3の火山灰は十和田a火山灰領域に分布することがわかる。

第118図にはFe因子を対比してある。第116図からも予想されるように、No 1、2、3の火山灰は十和田a領域に対応した。

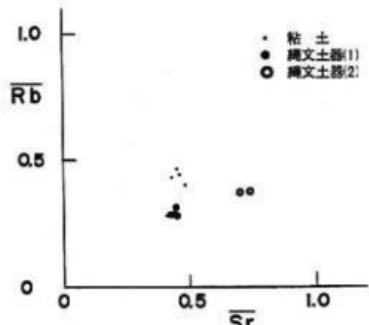
この結果、No 1、2、3は全因子で十和田a領域に対応したことになり、十和田a火山灰であると言える。

(2) 粘土と縄文土器

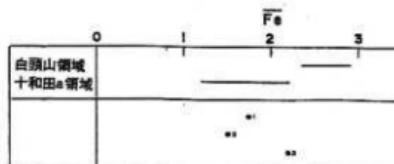
大湯環状列石周辺遺跡出土縄文土器と、その周辺で採集した粘土の化学特性を対比した。もし、胎土が同じならば2片の縄文土器は同じ化学特性をもつはずであり、また、この粘土を素材として縄文土器を作ったのなら、粘土の化学特性は縄文土器の化学特性と一致するはずである。

第119図にはRb-Sr分布図を示す。粘土は同一資料から5点、縄文土器(1)は3点、縄文土器(2)は2点の試料をとり分析した。第119図より、縄文土器(2)は縄文土器(1)や粘土から少し離れて分布し、化学特性が異なることを示唆する。

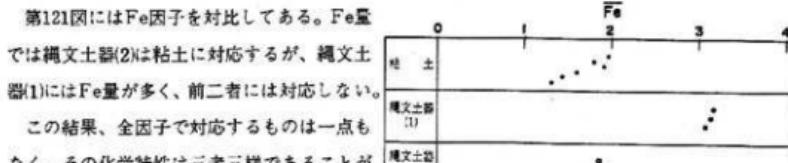
第120図にはK-Ca分布図を示す。粘土、縄文土器(1)、縄文土器(2)はいずれも少しずつ離れて分布し、その化学特性は三者三様であることを示唆する。



第119図 大湯環状列石周辺遺跡の粘土、縄文土器のRb-Sr分布図



第120図 大湯環状列石周辺遺跡の粘土、縄文土器のK-Ca分布図



第121図 大湯環状列石周辺遺跡の粘土、縄文土器のFe量

この結果、全因子で対応するものは一点もなく、その化学特性は三者三様であることがわかった。すなわち、縄文土器(1)と縄文土器(2)とは別胎土であること、また、これらの素

材粘土は遺跡周辺で採集した粘土とは別物であることが明らかになった。したがって、蛍光X線分析のデータをみると、これら三者には何の相互関係もないと言えるだろう。なお、同一土器でのばらつきは大きいものでないことは第119～121図をみれば明らかである。縄文土器と言えども須恵器同様、同一個体内での化学特性のばらつきは殆んど無視されることがわかった。

2. 大湯環状列石周辺遺跡出土赤色顔料ならびに樹脂状凝固物について

岩手県立博物館 赤沼英男

大湯環状列石周辺遺跡出土赤色顔料塊および赤色顔料を塗布した櫛の顔料同定ならびに土器内付着樹脂状凝固物質の自然科学的調査結果について報告する。

(1) 分析試料ならびに分析方法

調査試料は第7表に示す赤色顔料2点、土器内付着凝固物6点の合計8点である (PL 28)。

第7表 赤色顔料・樹脂状凝固物分析試料

No.	試 料 名	出 土 地
1	赤色顔料塊	238号フラスコ状土壤
2	櫛表面付着赤色顔料	201号堅穴遺構
3	土器(34図3)内付着茶褐色樹脂	ビット140
4	土器(73図9)内付着茶褐色樹脂	224号土壤
5	土器(58図1)内付着茶褐色樹脂	217号フラスコ状土壤 9層
6	土器(73図8)内付着黒色樹脂	220号土壤
7	黒色樹脂塊	238号フラスコ状土壤
8	黒色樹脂塊	247号土壤

赤色顔料の同定はX線回析分析法により行なった。分析には双眼実体顕微鏡下で表面に付着している土砂を極力取り除き、真空デシケーター中において充分に乾燥させた後、メノー乳鉢を用いて粉末化した試料を用いた。

土器内付着樹脂状凝固物質については、赤外分光分析法によりその素材の検討をおこなった。

(2) 分析結果

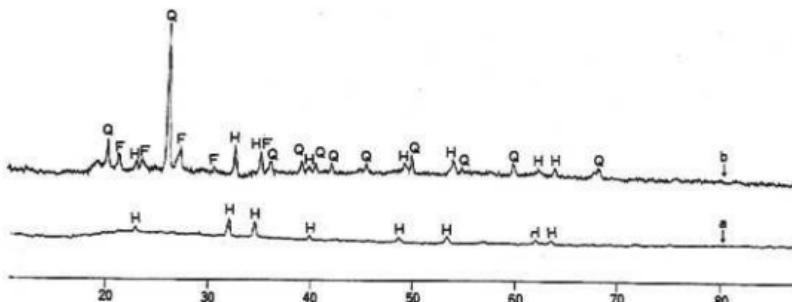
① 赤色顔料

第122図-aは試料No.1赤色顔料のX線回析像である。2.69・2.53・2.20・1.84および1.69 Åを主とする回析線を確認することができる。これは赤鉄鉱(Haematite- α -Fe₂O₃)の標準粉末データと一致する。従って試料No.1赤色顔料塊は赤鉄鉱(Haematite- α -Fe₂O₃)と判定される。

第122図-bは試料No.2(201号堅穴遺構出土物)に付着している赤色顔料片のX線回析像である。試料No.1と同様2.69・2.53・2.20・1.84および1.69 Åを主ピークとする赤鉄鉱のほかに4.26・3.34・2.46・2.12 Åを主ピークとする石英(Quartz- α -SiO₂)と4.04・3.76・3.62・3.20を主ピークとする灰長石(Anorthite-CaAl₂Si₂O₈)の3つが検出された。No.1の赤鉄鉱(赤色顔料塊)の中に、灰長石や粘土を添加し橙色としたものを幕の表面に塗布したのであろう。

② 土器内付着樹脂状凝固物質

第123図は樹脂状凝固物質の赤外吸収スペクトル図である。第123図-aは茶褐色を呈した試料No.3~5(以下Aグループと呼ぶ)の吸収スペクトルであるが、3600~3400cm⁻¹のOH伸縮による巾広い吸収帯、2930・2860cm⁻¹のオレフィン-CH伸縮による鋭い吸収、1720~1600cm⁻¹の吸収が特徴的である。Aグループは吸収パターンが一致していることから同一物質と推定され



H=Haematite (α -Fe₂O₃、赤鉄鉱)
C=Cinnabar (HgS、辰砂または朱)

Q=Quartz (SiO₂)
F=Anorthite (CaAl₂Si₂O₈)

a: SK(F)238、赤色顔料塊
b: ST201、釉

第122図 赤色顔料のX線回析像

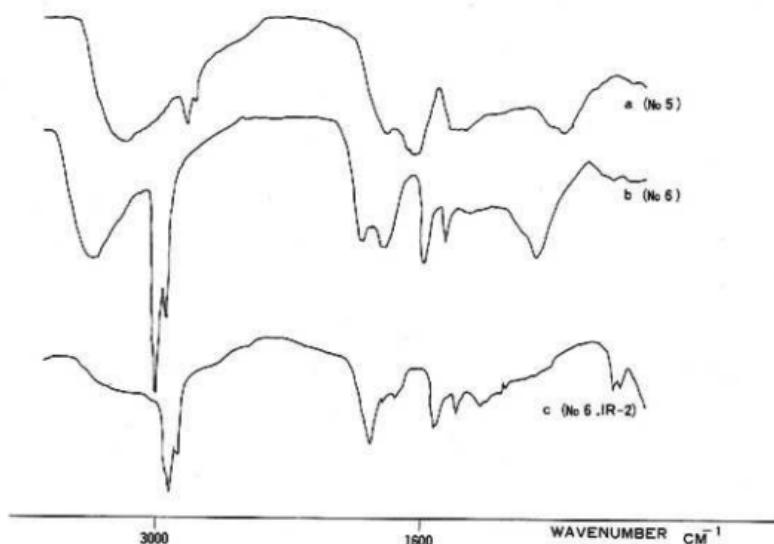
る。またクロロホルム・四塩化炭素に不溶であり化学的にきわめて安定した物質である。

このパターンは第102号フラスコ状土器内付着樹脂状凝固物^(注1)と全く同一であり、さらに淨法寺漆と類似しているところから、きわめて漆に近い物質と考えられる。Aグループの入った土器はいずれも樹液の保存容器として使用されたのであろう。

第123図-bは試料No.6~8の黒褐色をした土器内凝固物質の赤外吸収スペクトルである。吸収パターンはNo.6~8(以下Bグループと呼ぶ)全て一致しており、同一物質と考えられる。特徴的な吸収として3600~3400cm⁻¹のO H伸縮、2930~2860cm⁻¹にかけて認められるオレフィン-C H伸縮、1700~1600cm⁻¹のC=O伸縮をあげることができる。第123図-cはBグループ中に含まれるクロロホルム-メタノール(2:1)可溶樹脂成分の赤外吸収スペクトルである。動植物油中に含まれる高級脂肪酸塩の赤外吸収スペクトルと吸収パターンが近いことから食生活に関係した物質と推定される。今後、ガスクロマトグラフィー質量分析法により脂肪酸の組成を決定することによって何に起因する物質かを明確にすることができますであろう。

注1) 第2次大湯環状列石周辺遺跡発掘調査においてB区で検出された遺構

注2) 分析結果は「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(3) 1987-3」P97~99に収載している。



第123図 土器内付着樹脂状凝固物質の赤外吸収スペクトル

3. 大湯環状列石周辺遺跡出土の植物遺体について

尾去沢中学校教諭 成田 典彦

(1) はじめに

縄文時代の食用植物の堅果類であるクルミ・クリ・ドングリ類・トチノキの炭化種子が個別ではなくそろって出土したのは貴重なことである。これらの中にはアク抜きを必要とする堅果類も含まれ、当時の野生植物の利用水準や遺跡周辺の古植生を知る上でも貴重な資料を与えてくれたことになる。ここでは、炭化種子の記載と若干の古植生復元について述べることにする。

(2) 試料の処理

処理にあたってはバットに水を浸し、約1時間放置後水洗をした。水洗は水道水を落としながら軟らかいブラシで付着した黒土を除去した。遺体の流出を防ぐため、除去した黒土をメッシュに通した。表面の水分を軽く取り除き、ボリ管に保存し鑑定した。

(3) 植物遺体の状態

出土した植物遺体の遺構ごとの個数は第8表のとおりである。遺体はすべて炭化しており、火の影響を受けたものと考えられる。そのため保存もよく、クリについては完全な形のものが数点出土した。また堅果類のはかに炭化材の小片が出土しているが、樹種を鑑定できる大きさではない。(PL29)

① クリ

果皮が剥ぎ取られ、種子の皮(内果皮)や、いわゆる渋皮も付着していない。炭化している実は堅く、その表面には

しづが観察される。また

第8表 植物遺体の出土数

	クリ	クルミ	トチノキ	ドングリ	炭化材
Pit 17, 18	5(1)	—	—	—	—
Pit 19	—	—	—	1	1
Pit 21	—	—	5	—	—
Pit 54	1(1)	5	—	—	—
SK 239	1	1	2	1	—
SK 258	33130	—	—	1	26
SK(F)243	6(3)	—	56	1	6
SK(F)250	1(1)	5	—	—	—
計	34506	11	63	4	33

*クリの()内は完全な形で出土した数

*Pit17, 18, 19, 21, 54は発掘区南東部ピット群のピット

*炭化材は第201号建物跡Pit49でも検出されている

径は長径20.7mm、幅25.5mm (Pit17、18) のものである。

② クルミ

内果皮（核）の破片が少量出土した。核のとがった先端は欠損し核の推定の大きさは長径が26mm、幅は24mmである。核の表面はしわが少なく大きさからオニグルミと同定する。実は出土しなかった。

③ トチノキ

内果皮の破片に炭化した実が付着しているものが多くみられる。第243号フ拉斯コ状土壌、Pit21に集中して出土している。実はクリのように堅く固結せず、しわがなくホクホクした感じである。指で押さえ軽く力を加えるとこなごなになる。

④ ドングリ類

果皮が剥ぎ取られ、子葉の片側だけ出土している。1点は長さ14.5mm、幅10.9mm、他の2点もほぼ同じような大きさである。その大きさから二次林として遺跡周辺に生育していたコナラかミズナラの種子と考えられる。

(4) 考 察

現在、遺跡周辺にはスギ・カラマツの植栽やコナラ・ハンノキなど二次林的な樹木がみられる。林床にはチシマザサが見られることから、当時は遺跡周辺から山腹にかけてブナ・ナラの落葉広葉樹林で広く覆われていたと考えられる。大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(2)(1986)で行った黒土の花粉分析もそれを裏付けている。しかし、今回多量に出土したクリ・トチノキの花粉化石が検出されていないという結果は、花粉の保存状態によると考えられ、周辺の植生の中にクリ・トチノキが存在していたと考えるのが妥当である。これをふまえて古植生を考察してみると次のようなことがいえる。

トチノキはミズナラ・コナラ・オニグルミ・クリなどのように日当たりのよい場所に生育する樹木ではなく、どちらかといえば沢筋に生育する樹木である。したがって日当たりのよい段丘上ではなく、遺跡より少し離れた所に生育していたものと考えられる。それに対してミズナラ・コナラ・オニグルミ・クリは、自然発生が破壊され二次林が形成される遺跡周辺に出現する樹木である。とくにクリはきわめて広い範囲にある程度密度をもって分布することがあり、クリがクルミとともに栽培されていた可能性も考えられる。また、これからのかめ細かい炭化材の樹種鑑定結果によっては、クリが食料源としてのみならず、住居用材・燃料材として多目的に活用されていたことも考えられる。千野(1984)は縄文時代の住居用材に落葉広葉樹林が用いられ、とくに日本海側を中心とした多雪地帯では柱材などにクリの大径材を用いる例が多いことを指摘している。秋田県の代表的な樹木であるスギは、海岸平野や八幡平山腹の花粉分析のデータからも約2,500y.B.P. 以降に拡大してくるといわれ、この当時生育していたとは考

えがたい。

また、堅果類の食物としての活用については、次のようなことがいえる。多量に出土したクリ・クルミはアク抜きを必要とせず縄文早期にさかのぼって確認されている。クリは甘味をだすために一時的（冬季）に貯蔵穴に保存することが知られているが、大部分は屋根裏貯蔵と考えられている。今回出土したクリは内果皮がきれいに剥ぎ取られ、穂やかな乾燥を受けている。またすべての果肉には虫食いの跡さえ見られない。第258号土壙から出土したクリの破片の総重量は115.2gで、完全な形をしたクリの重量の平均を求めそれを基数にクリの個数を算出すると111個になる。ほかの堅果類に比べて活用度が大きいことが想像され、これらの大部分は屋根裏貯蔵から土壙内に落ちたものと考えられる。クルミは核の部分は残りやすいが実の部分は残りにくい。出土数は少ないが活用の割合は大きいと考えられる。また熱処理の必要はドングリ類さらに複雑なアク抜きの必要なトチは縄文中期以降の遺跡から出土している。特にトチはアク抜きの処理が複雑になってくるが、当時はその技術を会得し重要な食料源としていたと考えられる。このように縄文人は植物の特性や遷移をよく把握して、それを巧みに利用していたと考えられる。

参考文献

- 千野裕道（1984）；縄文時代のクリー炭化木材の樹種を中心に一、歴史公論No103、P44-51。
渡辺 誠（1985）；縄文文化の発達とブナ帯、ブナ帯文化、P87-106。

※以上の科学的調査のほかに、第215号土壙、258土壙、南東部柱穴状ピット20出土の炭化材の放射性炭素年代測定を日本アイソトープ協会に依頼している。その結果については、「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書（5）」に収載する予定である。

第VII章 分析と考察

1. 環状配石遺構について

今回確認された環状配石遺構は3基を数え、それぞれ発掘区北西端、中央部、南東端に位置する。

(1) 形態・規模

全貌を確認し得たのは220号環状配石だけであるが、ボーリング調査の結果3基とも同形態と考えられる。すなわち細長の石の長軸方向を繋いで数列から成る環帯を作り、その一部に張り出し部を有する構造である。環帯は15~60cmの石が用いられ、最小径である220号環状配石が1~2列、202、207号環状配石が3~5列より成る。帯幅は202号環状配石が70~120cm、207号環状配石が約80cmを測る。環の規模は220号環状配石が5.4m、207号環状配石が8.9m、202号環状配石が14.0mを測る。張り出し部は220号環状配石が細長の石で構成されるのに対し、202号環状配石は扁平な石を數きつめている。規模は202号環状配石が 3.6×2.6 m、207号環状配石が 2.6×2.5 m、220号環状配石が 1.4×0.9 mを測る。

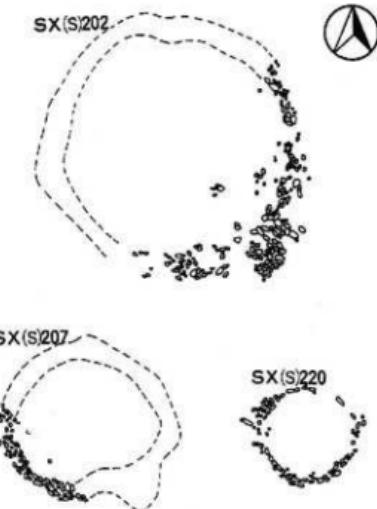
岩手県松尾村釜石環状列石の10号環状列石が、本遺構と同様の形態を示す。

(2) 時期

202号環状配石は201号建物跡、212号焼土と重複しておりいずれよりも新しい。212号焼土の時期は不明であるが、201号建物跡はピット内出土遺物より縄文時代後期前葉と考えられ、少なくとも202号環状配石は縄文後期前葉より古くなる事はない。また220号環状配石は重複する210~212号建物跡、222号焼土より新しい。210~212号建物跡、222号焼土とも出土遺物から縄文後期前葉と考えられ、220号環状配石も202号環状配石同様縄文後期前葉より古くなる事はない。環状配石の構築面環内・外部より縄文後期前~中葉の土器片が出土している事及び新旧関係より、構築時期は縄文後期前~中葉と考えられる。

(3) 付属施設

202号環状配石の環内部には226号配石、202号石圓炉、また226号配石と重複する方形ブ



付図2 環状配石遺構規模・方位比較図

ランの落ち込みが存在する。しかし構築面以下は未調査であるため、これらの遺構が環状配石に伴うかどうかは不明である。220号環状配石は配石直下を除く構築面下を調査したところ、本遺構に伴う施設は確認されなかった。

(4) 火熱された石について

環状配石を構成する石の中には火熱を受けているものが大分見られる。202、220号環状配石では確認された石の10~15%、207号環状配石に至っては32%が火熱を受けている。これらの石はある範囲に集中するのではなく、分散する傾向にある。また火熱された石がかなりあるにもかかわらず、焼土は確認されなかった。火熱された石を何らかの事由で配したものと考えられる。

(5) 張り出し部について

環状配石は現在まで確認されている大湯環状列石及び周辺遺跡の配石遺構とは形態を異にし、相異点の1つに張り出し部の有無がある。202、207号環状列石が同方向の南東部に張り出し部をもつて対し、220号環状配石は逆方向の北西部に張り出し部をもち、向い合う。これは環状配石の配置、性格等に起因すると思われるが、今回の調査では明らかにできなかった。

(佐藤 樹)

2. 建物跡と柱穴状ピット群について

D区からは、19棟の建物跡と239個の柱穴状ピットが確認された。これらの遺構は、発掘区北西部と南東部に偏在し、両地域で遺構の形態、分布密度等に違いがみられる。このため、北西部と南東部に分け、北西部については、主に形態の特異な第201号建物跡について分析を試みる。

(1) 北西部の建物跡について

北西部は、環状配石遺構、集石遺構、礫群等が集中する地域で、これらの遺構保存のため、柱穴状ピット確認面まで調査が及んでいない部分が点在し、柱配列が判明した建物跡は2棟にすぎない。ただ、南東部のように重複あるいは密集したピットは確認されておらず、建物跡の数も、南東部ほどにはならないものと考えられる。

1) 201号建物跡の形態、規模

201号建物跡は、主柱穴を五角形に配置し、その周間に径8.7mの環状に壁柱穴を一巡（南東部の出入口部を除く）させた建物跡で、建物跡内主軸線上には地床炉を有する。柱穴及び地床炉は、他の縄文後期前葉の遺構確認面と同じIIc~IId層上面で検出され、91ラインの基本層序でも、壁穴の掘り込みは確認されていない。このため、本遺構は壁穴遺構（住居）とはならず、平地式の獨立柱建物跡と考えられる。

大湯環状列石及び周辺遺跡の調査において、初めての検出であり、類例も少ない。県内にお

いては、藤株遺跡の22号竪穴住居跡（縄文晩期）が本遺構に類似する遺構と考えられる。報文では竪穴住居跡に分類しているが、壁が確認されていないこと、同形態の竪穴住居跡が検出されていないことから、竪穴住居跡ではなく、掘立柱建物跡と考えられる。県外においては、岩手県北上市八天遺跡の5号家屋跡（縄文後期）が類似する。擾乱が床面にまで及び、地床炉は確認されていないが、主柱穴の配置、壁柱穴、出入口部の存在及びその形態より、本遺構と同一の遺構と考えられる。

II) 構造

主柱穴と壁柱穴が一連のものであることは、確認面が同じであること、主軸線が一致することから疑う余地はない。しかし、主柱穴と壁柱穴が一体となり、一棟の建物跡となるのか、壁柱穴列としたものが5本柱の建物跡を囲む階級状の構造物となるかは、今回の調査資料からは明らかにできない。

主柱穴と壁柱穴が一体のものとすると、この建物はかなり強固なものとなる。径91～138cm、深さ136～152cm、柱底径27～31cmの主柱穴に、さらに柱穴間隔の狭い径27cm、深さ40～71cmの壁柱穴が伴うとすれば、どのような建物となるであろうか。壁柱穴は、ほぼ垂直に掘られており、直立する壁が一巡する可能性は高い。また、主柱穴の配置が正五角形であり、円錐形の屋根と想定され、この屋根が環状の壁に接続することに矛盾はない。

出入口部両端の特殊ピット底面内側には幅12～18cm、長さ104～114cm、深さ14～8cmの溝を有し、左側のピット（Pit49）の溝部分からは幅5mmの板状の炭化材が検出されている。炭化及び周囲埋土圧による収縮を考慮すると、数cmの厚さの板材が出入口部両端に立てられていたものと考えられる。なお、この炭化材は落葉広葉樹で、クリの可能性があるという同定結果を得ている。主柱、壁柱材も同一の樹種であろうか。

III) 構築時期

本遺構は201号竪穴遺構、202号環状配石遺構他と重複している。主柱穴の1つ（Pit79）は201号竪穴遺構覆土を掘り込み、地床炉（焼土2）は同遺構覆土上に位置する。また、環状配石遺構とは北側壁柱穴部分で重複し、柱穴列上に環状配石遺構が構築されている。このため、本遺構は201号竪穴遺構より新しく、202号環状配石遺構より古い。

201号竪穴遺構からは、8点の完形及び復元土器の出土があり、そのほとんどが底面または底面直上の出土であった。これらの土器はいずれも後期前葉に位置づけられる。202号環状配石遺構については、配石下の調査が行われておらず、明確にはできないが、構築面及び周辺の遺物から後期前～中葉と考えられる。これらの新旧関係及び本遺構柱穴及び地床炉の出土遺物から、本遺構の構築時期は後期前葉、廃棄時期は後期前～中葉と考えられる。

4) 機能、性格

本遺構と同形態の遺構は、検出例が少ないとあってこれまで大型住居跡の中に混在され、論じられてきた。しかし、竪穴式ではなく、平地式の建物跡であること、出入口部を除き密に一巡する壁柱穴を有すること、1遺跡1時期に1棟しか存在しない可能性が高いこと等から、大型住居跡とは区別し、その性格を追求する必要がある。

藤株遺跡や八天遺跡でも、この種の遺構は1基しか確認されていない。さらに八天遺跡においては、同一地点で9回も改築されている。このことは、この遺構が特殊な遺構であるとともに、この地点が特別な場であることを暗示している。

本遺構は、D区北西端、台地縁辺部に位置する。小沢が入り込んでいる部分で、その斜面下位には源泉がある。また大湯川が最も台地に近づく部分でもあり、大湯環状列石及び周辺遺跡にとって、特異な地点と言える。本遺構周辺において確認された遺構は、縄文時代後期に限定すると、環状配石遺構、集石遺構、礫群等であり、この周辺が居住区とは考えられない。

このようなことから、本遺構は一般的な住居跡とは考えられず、また南東部に位置する建物跡群とも性格を異なる建物跡と考えられる。1集落あるいは数集落に1棟の割合で建築される性格の建物跡と考えたい。

(2) 南東部の建物跡について

南東部からは317個の柱穴状ピットが検出された。これらのピットの大部分は、その形態、規模、深さ、柱痕等より、長方形を基調とする建物跡（長方形柱穴列）の柱穴と考えられる。これらのピットは、万座環状列石外帯から42m（列石中心から65m）内に分布し、さらに発掘区南西及び東方向に延びる様相を呈している。

これらのピットから少なくとも30棟の建物跡の存在が予想されるが、ここでは柱配列を明確にできた17棟の建物跡について分析を試みる。

I) 建物跡の形態、規模

南東部から検出された建物跡は4～8個の柱穴により構成される。柱穴の数及び柱配列の相違から、次のように形態分類した。なおVI類としたものは南東部からは検出されていないが比較のため記載した。

I類 各辺とも2個ずつの計4個の柱穴で方形を区画するもの

……SB 206、210、211、212、217、218、220

II類 6個の柱穴で六角形を区画するもの

……SB 203、204、205、207、208、209、213、214

III類 長辺3、短辺2の計6個の柱穴で方形を区画するもの……(SB 216)、(SB 219)

IV類 各辺とも3個ずつの計8個の柱穴で方形を区画するもの……(SB 219)

V類 8個の柱穴で六角形を区画するもの

……(SB 216)

VI類 5個の主柱穴を五角形に配置し、その周囲に壁柱穴を環状に巡らすもの

このように、南東部で検出された建物跡は、I類7棟、II類8棟と、I、II類で大多数を占める。

I類の長辺と短辺はほぼ等しく、平面形は正方形に近い。長辺は2.2~3.4mと幅があり、その規模から、1類2.8~3.4m(SB 206、

211、212、220)、2類2.2~2.4m(SB 210、217、218)に細分できる。1類は柱穴の規模も大きく、径42~116cm、深さ90~164cm、2類は径38~66cm、深さ45~136cmを測る。

II類は、四隅の柱穴と短辺に平行な中軸線上の1対2個の計6個の柱穴から成り、中軸線上の柱穴は外に張り出し、全体として六角形の柱配列となる。中軸線上柱穴の張り出しの大きいもの(SB 204、205、209、214)と小さいもの(SB 203、207、208、213)があり、前者を1類、後者を2類として、分析を試みる。1類の長辺は3.2~4.3m、短辺2.7~3.4m、張り出し部軸長3.7~5.1m、2類の長辺は3.4~4.4m、短辺2.9~3.8m、張り出し部軸長3.4~5.3mを測り、若干2類の規模が大きい。また、これらの建物を構成する柱穴も1類の径32~110cm、深さ42~119cm、2類の径30~128cm、深さ63~139cmと同様の傾向を示す。

Ⅱ) 建物跡の構築時期

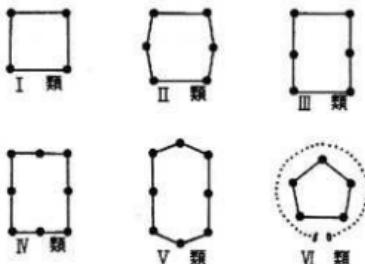
建物跡を構成する柱穴は黒層上面の黒色土面で確認されている。黒層上面は縄文時代後期前~中葉の竪穴造構、フラスコ状土壙等の構築面であり、南東部の同層及びその上層から後期以外の遺物の出土はない。また後期中葉まで下る可能性もある220号環状配石造構、218、219号配石造構等よりは全ての建物跡、柱穴状ピットが古く、建物跡の柱穴と考えられるピットの出土遺物は後期前葉に位置づけられるものである。

このようなことから、これらの建物跡は歴期に渡る時間幅を持ちながらも、その構築時期は後期前葉の中に収まると考えられる。

Ⅲ) 建物跡の分布

建物跡の分布を考えるには、まだ資料不足であるが、今回の調査のまとめと、若干の推測を行いたい。

柱穴状ピットの分布は、先に述べたとおり、環状列石外帯から42m内であるが、建物跡を構



付図3 建物跡柱列模式図

成する柱穴として確定したピットは30m内に位置する。17棟の建物跡のうち14棟は外帯から14m内に入り、14~21m間には1棟のみ、21~30m間には2棟が位置する。また、14m内に入る14棟はさらに7mを境に2分される傾向を示している。以下、便宜的に外帯から7mまでを環1、7mから14mを環2、14mから21mを環3、21mから30mを環4とする。

環1には8棟が位置し、最も分布密度が高い。これらの8棟はすべてⅡ類とした6本柱の建物跡で、本類は環1以外では検出されていない。

環2には4棟が位置する。環1に跨る2棟を加えても、環1よりは少ない。環1より分布密度が低くなることは、両環の柱穴状ピット数の比較においても変わらない。本環内及び環1に跨る6棟の建物跡のうち5棟はⅠ類とした4本柱の建物跡で、1棟がⅢ類の6本柱またはV類の8本柱の建物跡である。

環3には、フ拉斯コ状土壙、土壙等が集中する。多数のピットが検出されているが、建物跡としては、218号建物跡1棟しか確認されていない。これらのピットは、他の環のピットに比べ、径が小さく、掘り込みが浅いものが多い。また柱痕の確認されたピットもない。このようなことから、この環内の大部分は建物跡の柱穴とはならないものと考えられる。また218号建物跡は4本柱の建物跡で、環2でみられた4本柱の建物跡と形態上は似ているが、柱穴の深さが浅く、長軸方向が大きく異なる。他の環の建物跡の長軸方向がほぼ万座環状列石の中心を向くか、求心線に直交するのに対し、218号建物跡の長軸方向は求心線と45°の傾きをもつ。このため、本建物跡は、他の建物跡とは構造あるいは性格が異なる建物跡と考えられる。

環4からは2棟の建物跡が検出された。発掘幅が環1、2の半分であることを考慮すると、環2程度の分布密度になるものと考えられる。

このように、万座環状列石近傍から検出された建物跡は、環状列石を中心とする環上に位置する。さらに、その環は幅約7mの4環に分割でき、環ごと建物跡の形態、分布密度が異なる傾向を示している。これらの建物跡が、列石の周囲を同様の規則性で一巡するかどうかは、今後の調査を待たなければならないが、関連する問題点を簡単にまとめておく。

1. 佐々木勝氏の指摘どおり、昭和27年に万座環状列石北西側近傍（第2発掘溝）より検出された住居跡が長方形柱穴列（建物跡）となるか。同遺構内検出の焼土の取り扱いが問題となろう。
2. 同年の万座環状列石南側近傍に設定された第1発掘溝では、フ拉斯コ状土壙（大穴）、石圓炉等は検出されているが、建物跡や柱穴状ピットが確認されていないという事実。建物跡が同一の規則性で一巡しないという資料となり得るか。
3. 建物跡が列石外帯側にどれだけ近づくか、列石と重複するかどうか。27年の調査において、第12、38、46号組石下で確認された大小さまざまのピットと建物跡との関連が問題と

言える。

さて、建物跡の重複関係から、これらの建物跡は同時に存在したものではなく、4期以上にわたって構築されている。しかし、新旧関係を明確できなかったものもあり、各期への分解、位置関係、変遷、列石組石との関連等については、次年度の隣接地の調査結果と合せて分析を試みたい。

iv) 建物跡の機能、性格

昭和26、27年の文化財保護委員会の調査や、周辺遺跡A区の配石遺構群域の調査結果から、環状列石を配石墓の集合体と考える。南東部で検出された建物跡は、個々の対応関係までは把握してないが、これらの環状配石墓群と密接な関連をもつことは、先に述べたとおりである。

墓壇群の周囲に建物跡が一巡する調査例は近年増え続けている。東北地方では岩手県西山遺跡がその代表的遺跡として取り上げられている。西山遺跡の集落構造は、中央部に墓壇と考えられる土壙群が、長軸を中心部に向か同心円状に並び、その外側に長方形柱穴列（建物跡）が環状に一巡し、さらにその外側に住居跡群と貯蔵穴群から成る居住区が位置するという構造である。

西田遺跡検出の柱穴列の特徴は次のようにまとめられている。

1. 柱穴列の分布状態とその軸方向は墓壇の分布状態が示すそれと密接に関連し、それぞれが明確な対応関係をもっている。
2. 柱穴列を構成する個々のピットの構造は、その大半が掘り方を行するもので、後世の掘立柱構と類似している。
3. 柱穴列は掘り込み面をもたない平地式でつくられる。
4. 柱穴列の上屋構造は長軸方向に棟持ち柱をもつ切妻式のものが一般的らしい。
5. 遺物が直接共伴するものはみられず、柱穴列の用途は、使用された遺物がすぐにでも取り除かなければならないような目的に使われる施設と考えられる。
6. 柱穴列が機能するに際して火の使用はごく一部の例外となるもので、一般的に火は使用しないものらしい。

これらの諸特徴を、本遺跡の建物跡が満たしているかどうか検討する。1～3は、これまで述べてきたとおり、ほぼ満たしている。4の上屋構造については、I、III、IV類の方形プランのものと、II、V類の六角形プランの建物跡の上屋構造が同一となるかどうかは資料不足のため、不明である。円錐状の屋根と考えられるVI類の建物跡の存在することも考慮する必要がある。5の遺物の出土状況については、建物跡を構成する柱穴内出土遺物以外は共伴する遺物か否かの判定がむずかしい。ただ、IIa～IIc層を含めた遺物平面分布密度は他地域に比べて低く、特に他遺構との重複のない部分においてはその傾向は一層高い。6の火の使用、炉の存在につ

いては、建物跡群域から6基の焼土遺構が検出されているが、確認面、重複関係、建物跡との相対的位置関係から、確実に建物跡内の炉跡と考えられるものはない。また、30棟以上の建物跡に対して6基の焼土遺構しか確認されていないことから、日常的に火を必要としない建物と考えられる。

以上のように、本遺跡の建物跡は、西田遺跡の長方形柱穴列（建物跡）とほぼ同じ特徴を有する。本遺跡の場合はまだ竪穴住居跡が検出されておらず、不安も残るが、これらの建物跡を西田遺跡の長方形柱穴列と同一性格、すなわち祭祀にかかわる施設と考えたい。土壙墓と配石墓という形態上の違いはあるにしろ、墓域に隣接し、墓域と密接な対応関係を有する施設であることから、殯（もがり）、靈送りの場と考えられる。

（秋元信夫）

第VII章 調査のまとめ

大湯環状列石及びその周辺遺跡は、米代川の一支流、大湯川の南東岸の台地（標高180m前後）上に位置する。昭和59年より継続されている周辺遺跡の発掘調査も本年度で4年目となつた。第1～3次の調査では、大湯環状列石の性格解明を目的にして、野中堂環状列石北東300m、地点（A区）の配石遺構の調査に主力が注がれた。この調査では、すべての配石下に土壌が存在すること、甕棺、副葬品の出土、残存脂肪分析結果等から、配石遺構が配石墓であることが判明し、さらに、構造の類似する野中堂、万座の両環状列石もまた配石墓の集合体であろうと推察するに至つた。これらの推察の資料を得るためにA区の調査とともに、第2次調査においては野中堂環状列石北東側近接地（B区）、第3次調査では万座環状列石の東方80m地点（C区）の調査を行つてゐる。両調査から、列石周辺には列石との関連が考えられる遺構が分布し、それらは列石からの距離によって遺構の種類や分布密度が異なることが予想された。

このため本年度は調査区の1つを万座環状列石の北西側隣接地に設定し、列石外帯際から台地縁辺まで延ばした細長い調査区をD区とした。なおD区の発掘面積は1,172m²であった。

調査の結果、D区からは縄文時代後期の環状配石遺構3基、立石遺構7基、配石遺構10基、集石遺構2基、礫群3ヶ所、建物跡19棟、柱穴状ピット239個、石圓炉4基、焼土遺構22基、竪穴遺構2基、Tピット2基、フ拉斯コ状土壙12基、土壙38基、埋設土器遺構6基、平安時代の竪穴住居跡3棟、土壙3基が検出された。また遺構内・外より縄文時代の遺物としては復元土器159点、縄文土器片ダンボール箱41箱、石器871点、土製品537点、石製品64点、平安時代の遺物は土師器1/4箱、須恵器1点、石器1点の出土があった。さらに自然遺物として、遺構内より堅果種子423点、黒色樹脂塊2点の出土があった。

環状配石遺構は、一部に張り出しを有する環状の配石遺構で、環帯部は細長い石の長軸方向を繋いで数列からなる環帯となし、張り出し部には平石が散かれている。径5.4～14.0mを測り、環状列石を構成する組石遺構やA区配石遺構群域内の配石遺構とは、形態、規模の面で趣を異にする。遺構保存のために配石下の調査を実施しておらず、性格は不明である。今後の類例の増加を待ちたい。

建物跡19棟のうち、発掘区北西端に位置する1棟（201号建物跡）は、五角形に配置した柱穴の周囲に、出入口を除いて壁柱穴を一巡させた掘立柱建物跡で、本遺跡において初めて確認された遺構である。秋田県藤株遺跡、岩手県八天遺跡等で検出されている遺構に類似する。各遺跡で1棟しか確認されておらず、1時期に、1集落あるいは数集落に1棟の割合で構築される特殊な遺構と考えられる。なお本遺構は後期前葉に位置づけられ、八天、藤株遺跡のものよりも古い。

南東部に位置する17棟の建物跡は第Ⅶ章で述べたように、万座環状列石と密接な位置関係を呈する。列石組石との相対関係まではまだ把握していないが、岩手県西田遺跡における墓壙群とその回りに一巡する長方形柱穴列との関係に類似している。配石墓群（環状列石）の周囲に位置する祭祀施設、殯（もがり）の場と考えられる。

竪穴造構2基のうち、北西端で確認された1基（201号竪穴造構）は、炉跡がないこと、底面に特殊な凹地をもつこと、さらにその凹地より赤色顔料の塗布された土器及び櫛が出土していることから、一般の竪穴住居跡とは考えられない。

土壤、フ拉斯コ状土壤は、南東部建物跡群が希薄となる部分（環3）から中央部にかけて多く分布する。建物跡群域内に位置する後期前葉に位置づけられるフ拉斯コ状土壤等は、建物跡と同様に万座環状列石と関連ある配置と考えられる。中央部に位置する土壤については、北西側造構との関連を有するのか、中央部に一つの規則性を持って分布するのか、今後の課題したい。

出土遺物は、膨大な量で、今までの調査で最も多い。縄文土器のほとんどは後期前葉に位置づけられるが、他に早期中葉の貝殻沈線文系土器の尖底部1点、前期末の円筒下層d式土器片180点、後期中葉の土器片246点を出土している。早期、前期の土器の出土は、環状列石が構築される以前に、縄文人が何らかの形でこの地を利用していたことを物語っている。今後、同期の遺構が検出される可能性もある。後期の土器としては、片口土器、一対の橢状把手を有する土器、底面に多数の孔を有する鉢形土器、切断土器等、器種、器形の特異なものの中出土もあった。漆と考えられる茶褐色樹脂、アスファルトあるいは食生活に関係した物質と考えられる黒色樹脂の付着した土器の出土は、当時の技術や食生活を推察する貴重な資料となろう。クリ、トチノキ、クルミ、ドングリ等の炭化堅果類の出土は、食生活を復原する直接的な資料と言える。なお、第201号建物跡出入口部炭化板材と建物跡群内ピット20の柱痕部出土の炭化材がクリであるという樹種同定結果は、クリが建材としても使用されていたことを示している。

平安時代の遺構は、これまで環状列石から遠く離れた周辺遺跡の縁辺部に位置するものと考えられてきたが、今回の調査で列石近辺にも分布することが明らかとなった。

E区は万座環状列石北東方向300mほどの地点で、周辺遺跡北東端部分の遺構の有無を確認することが調査の目的であった。E区からは時期不明の土壤1基が検出され、縄文後期土器片11点、石器3点の出土があった。この調査によって、遺構は均一に分布するのではなく、いくつかの地域に群集する傾向があることが確認できた。

（秋元信夫）

参考・引用文献

- 阿部義平 「“日時計”の考察—大湯環状列石の配石類型の意味」『よねしろ考古』第2号 1986年
- 江坂輝彌 「石神遺跡」 ニュー・サイエンス社 1976年
- 岡田泰博 「十渡内第Ⅲ群、第Ⅳ群、第V群土器の再検討」『弘前大学考古学研究』第3号 1986年
- 桜田 隆 「鹿角盆地に於ける古代土器群の様相(Ⅰ)」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』 第2号 秋田県埋蔵文化財センター 1987年
- 鉢木道之助『図録 石器の基礎知識Ⅲ 縄文』柏書房 1981年
- 高山 純 「大成、石神台配石遺構発掘報告書」 大城町教育委員会 1974年
- 宮澤泰時 「大湯浮石層と鹿角盆地の遺跡」「どるめん」 1978年
- 成田滋彦 「青森県の土器」『縄文文化の研究4』 雄山閣 1981年
- 水野正好 「環状列石の意味するもの」『信濃』第20巻4号 1968年
- 「ストーンサークルの意義」『季刊考古学』第9号 雄山閣 1984年
- 三宅徹也 「円筒土器」『縄文文化の研究3』 雄山閣 1982年
- 村越 潔 「円筒土器文化」 雄山閣 1974年
- 山内静男 「日本先史土器の綱紋」『先史考古学』 1979年
- 文化財保護委員会 「大湯町環状列石」 1953年
- 青森県教育委員会 「中ノ平遺跡」 1974年
「大平遺跡」 1979年
「一ノ渡遺跡」 1983年
「大石平遺跡II」 1985年
- 八戸市教育委員会 「長七谷地遺跡発掘調査報告書—長七谷地2、7、8遺跡」 1982年
- 岩手県教育委員会 「西田遺跡」 1980年
- 岩手県立博物館 「岩手の土器」 1982年
- 岩手県埋蔵文化財センター 「釜石環状列石」「岩手県の遺跡」 1985年
- 北上市教育委員会 「八天遺跡」 1978年
- 大迫町教育委員会 「立石遺跡」 1979年
- 秋田県教育委員会 「大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報」 1975年
「藤株遺跡」 1981年
- 秋田県教育委員会 「鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡緊急分布調査報告書』 1974年
比内町教育委員会 「本道遺跡」 1986年
- 鹿角市教育委員会 「昭和50年度大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報」 1976年
「昭和51年度大湯環状列石周辺遺跡分布調査報告書」 1977年
「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(1)」 1985年
「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(2)」 1986年
「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(3)」 1987年
- 鹿角市 「鹿角市史」 第1巻 1982年



D区全景（前方 万座環状列石）



D区南東部遺構群

PL 1 D区全景、南東部遺構群

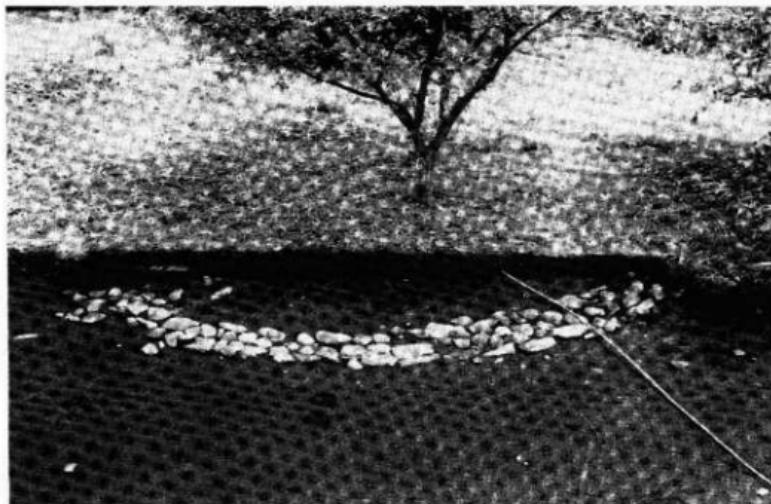


D区北西部遺構群

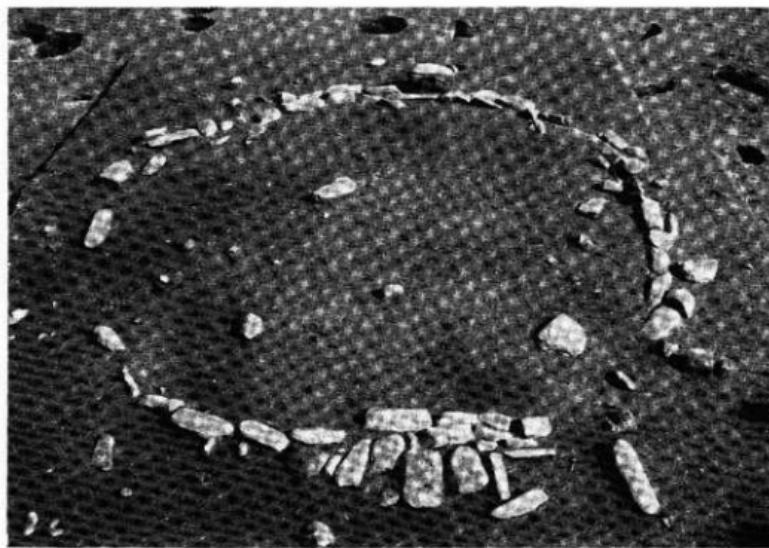


第202号環状配石遺構

P L 2 D区北西部遺構群、第202号環状配石遺構



第207号環状配石造構



第220号環状配石造構

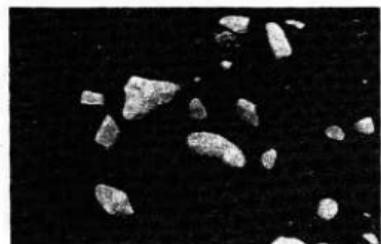
P L. 3 第207、220号環状配石造構



第216号立石遗構



第217号立石遺構



第204号配石遺構



第204号配石遺構断面



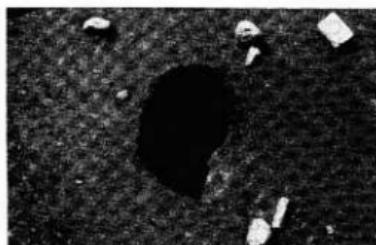
第204号配石下土壤



第206号配石遺構

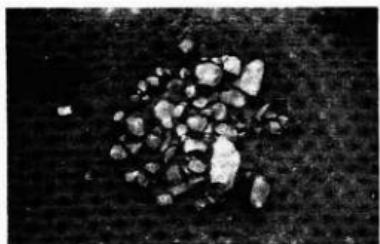


第219号配石遺構

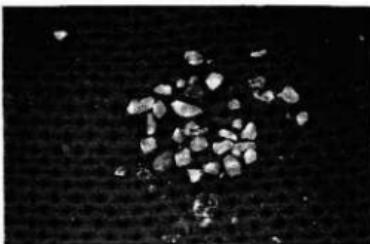


第219号配石下土壤

P L 4 第216、217号立石遺構、第204、206、219号配石遺構



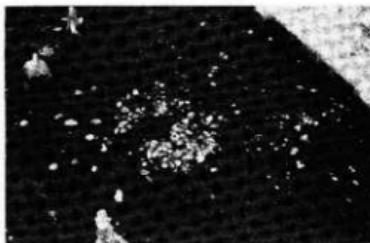
第214号集石遺構



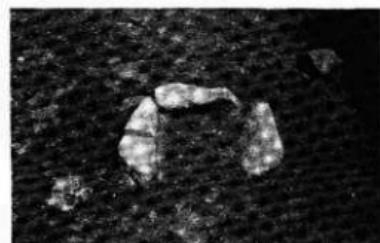
第215号集石遺構



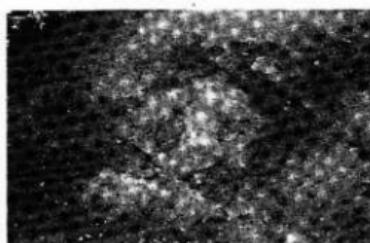
第215号集石遺構断面



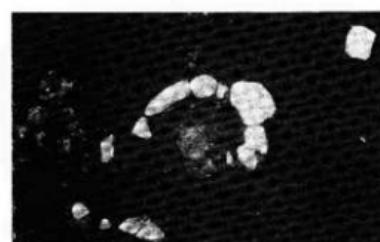
第201号礫群



第201号石圈炉



第202号石圈炉

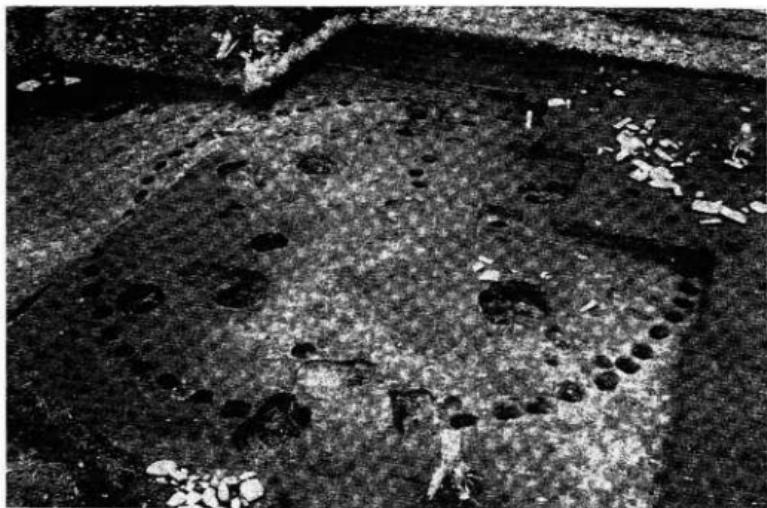


第204号石圈炉

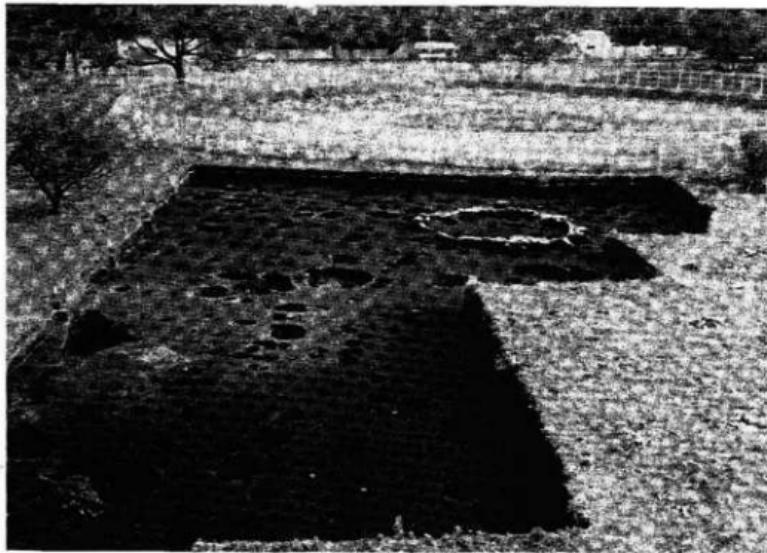


第204号断面

P L 5 第214、215号集石遺構、第201号礫群、第201、202、204号石圈炉



第201、202号建物跡

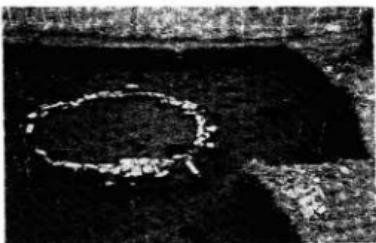


第203～220号建物跡

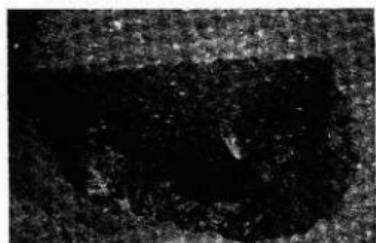
P L 6 第201～220号建物跡



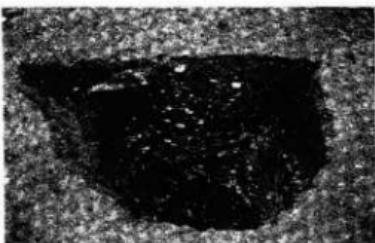
第203～209、216、217号建物跡



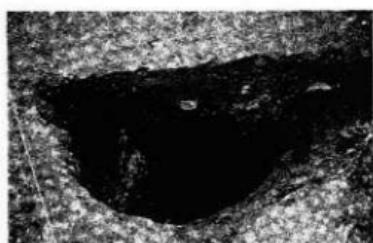
第210～214号建物跡



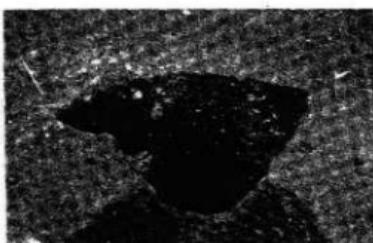
ピット1 断面



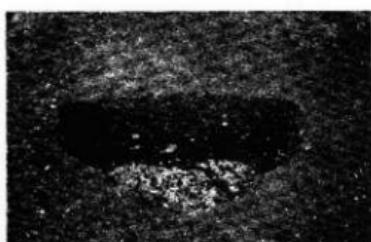
ピット2 断面



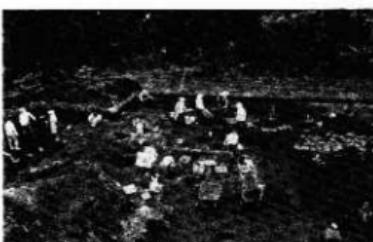
ピット3 断面



ピット57、58 断面

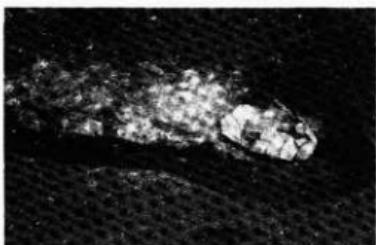


ピット62、63 断面

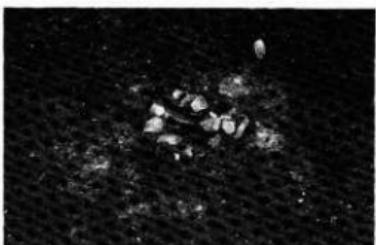


作業風景

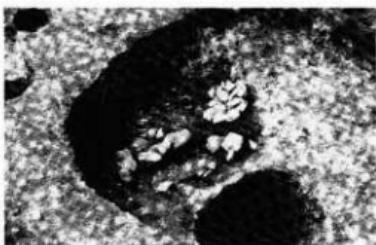
PL 7 第203～214、216、217号建物跡、ピット断面図、作業風景



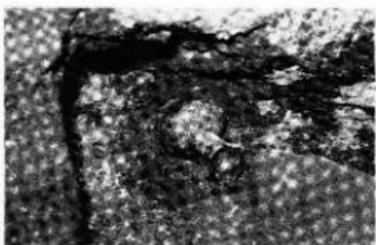
第209号竖穴遗构断面



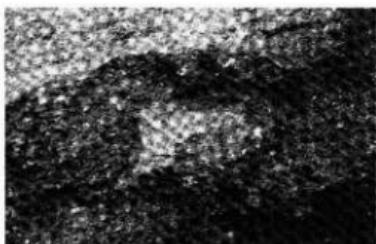
第210号竖穴遗构



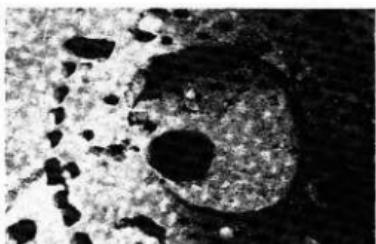
第201号竖穴遗构遗物出土状况



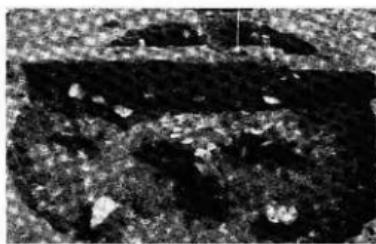
第201号竖穴遗构遗物出土状况



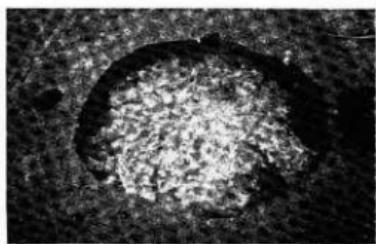
第201号竖穴遗构遗物出土状况



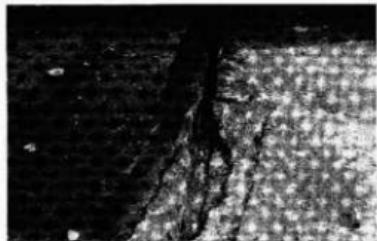
第201号竖穴遗构



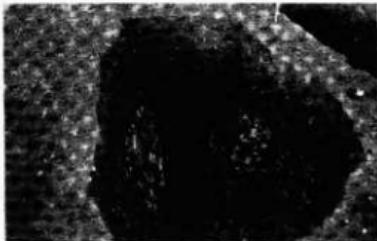
第202号竖穴遗构遗物出土状况



第202号竖穴遗构



第210号T ピット



第235号T ピット断面



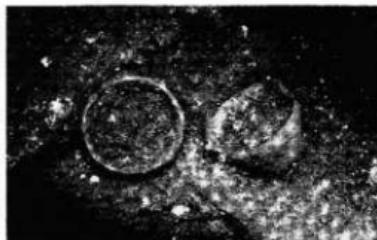
第235号T ピット、第242号 フラスコ状土壤



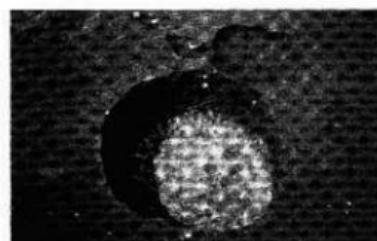
郷土の歴史にふれて(中津小学校体験学習)



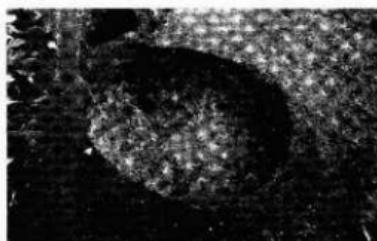
第217号 フラスコ状土壤



第217号 フラスコ状土壤遺物出土状況

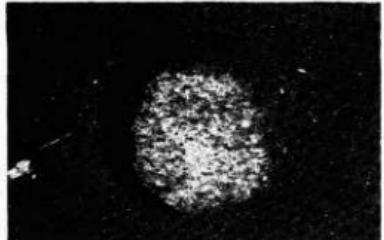


第207、208号土壤

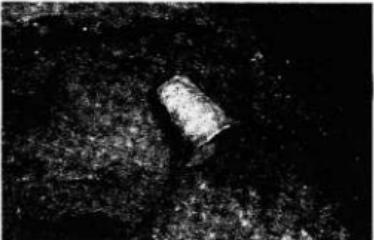


第216号土壤

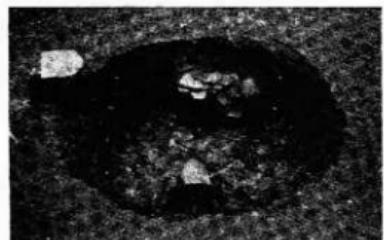
P L 9 第210、235号T ピット、第217号 フラスコ状土壤、第207、208、216号土壤



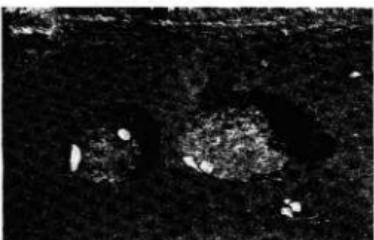
第220号土 壤



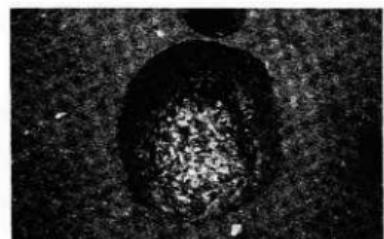
第220号土壤遗物出土状况



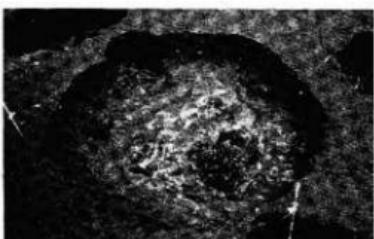
第223号土 壤



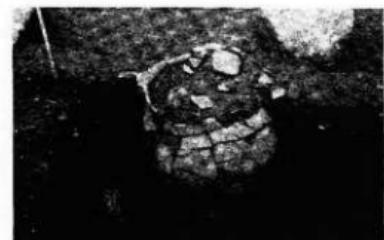
第229、231号土壤



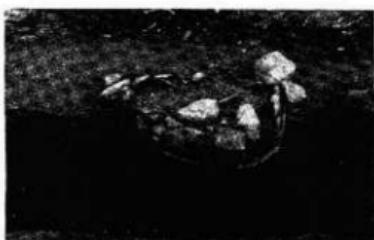
第255号土 壤



第258号土 壤

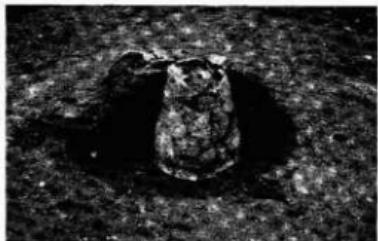


第201号埋設土器遺構

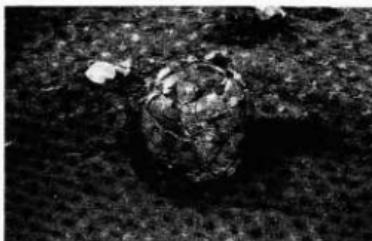


第202号埋設土器遺構

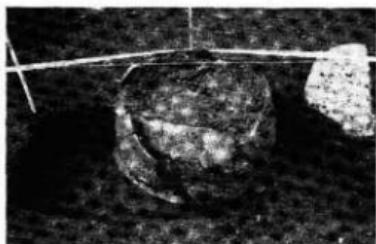
P L 10 第220、223、229、231、255、258号土壤、第201、202号埋設土器遺構



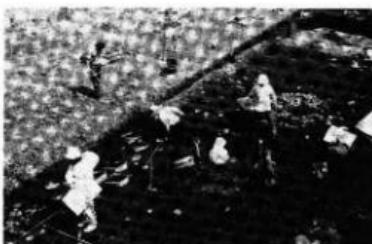
第205号埋設土器遺構



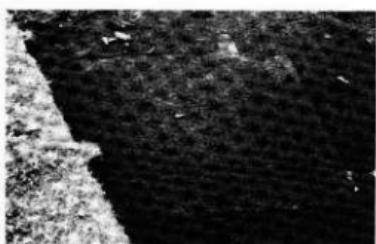
第206号埋設土器遺構



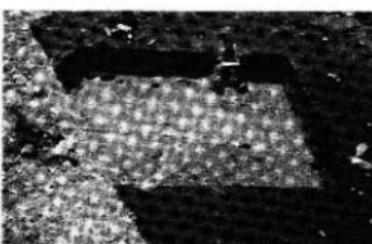
第207号埋設土器遺構



D区作業風景



第201号住居跡確認状況



第201号住居跡



第201号住居跡カマド

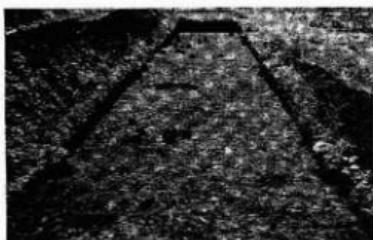


現地説明会

P L 11 第205～207号埋設土器遺構、第201号住居跡



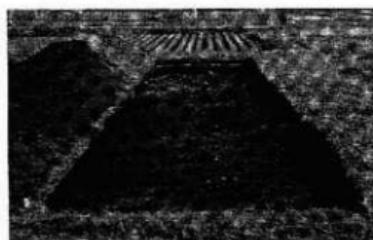
E区全景象



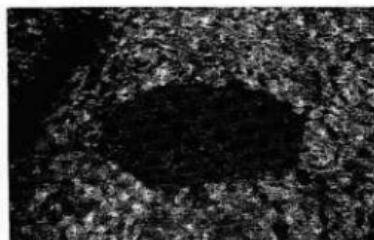
9ライントレーニチ



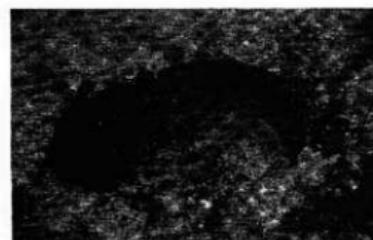
13ライントレーニチ



15ライントレーニチ



第301号土壤確認状況

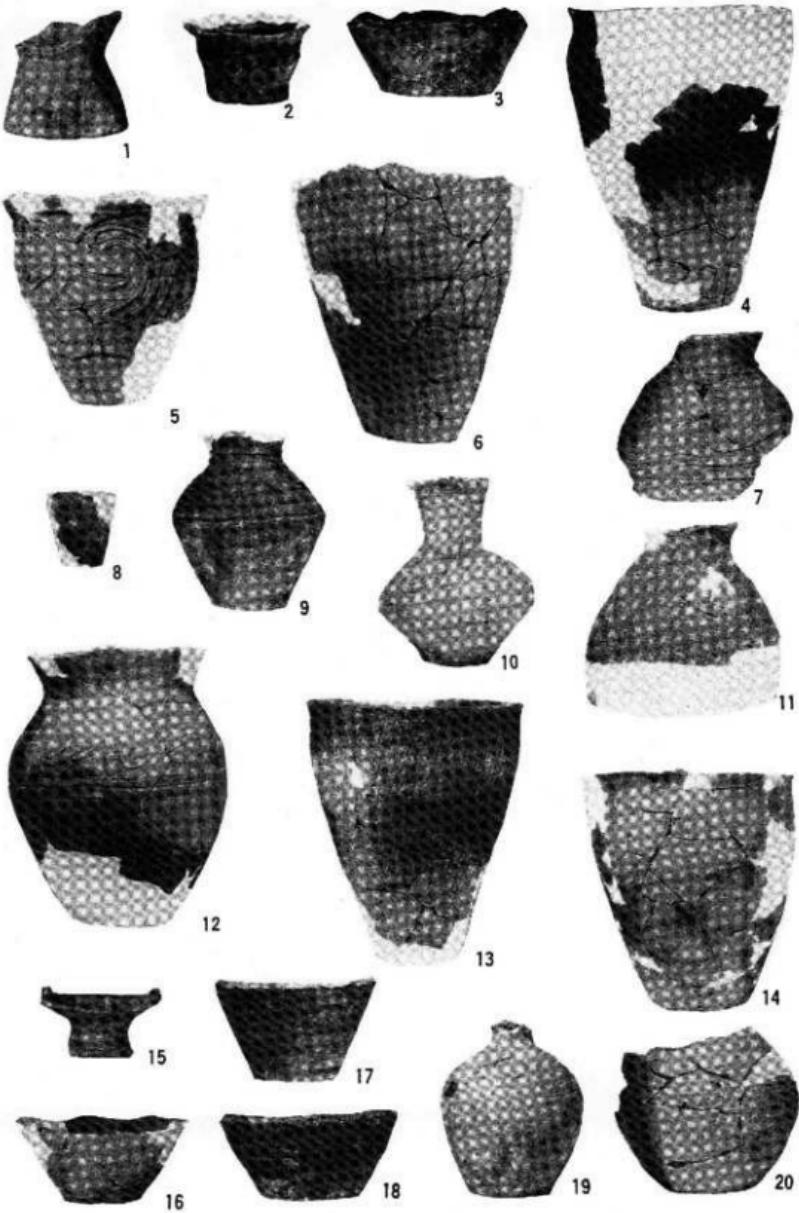


第301号土壤

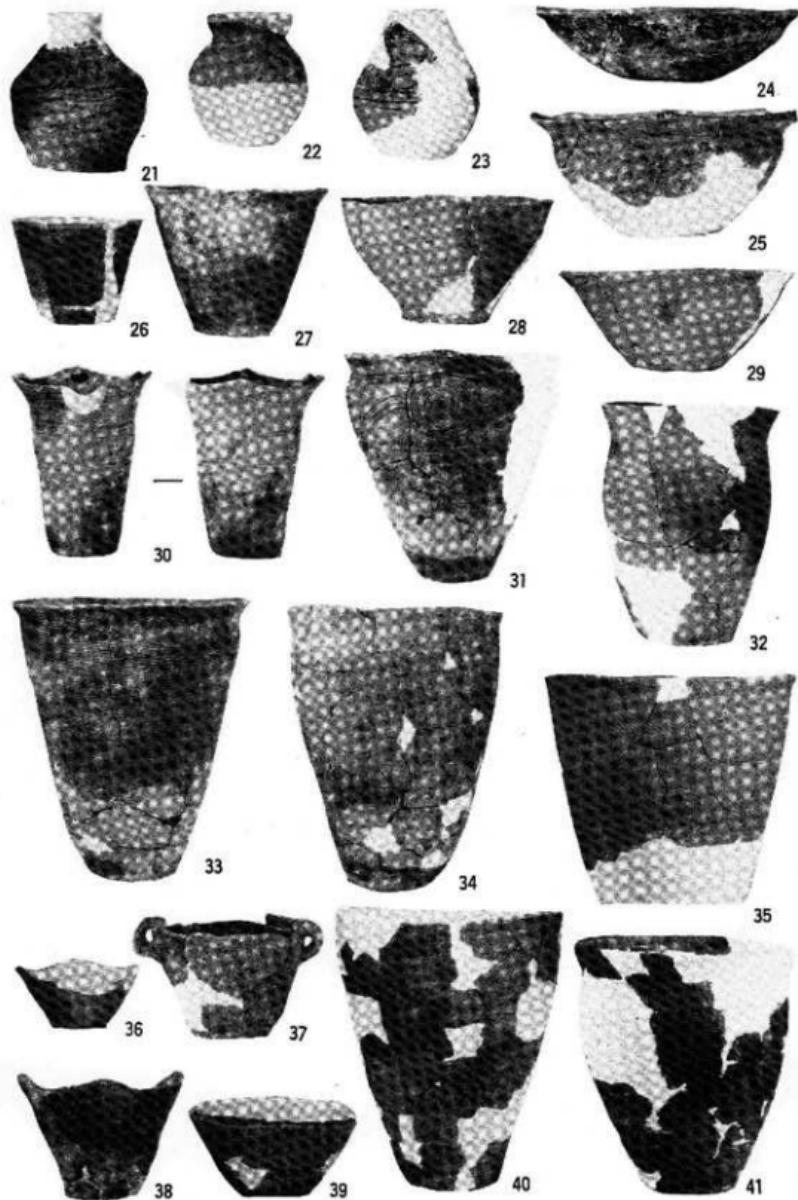


調査参加者

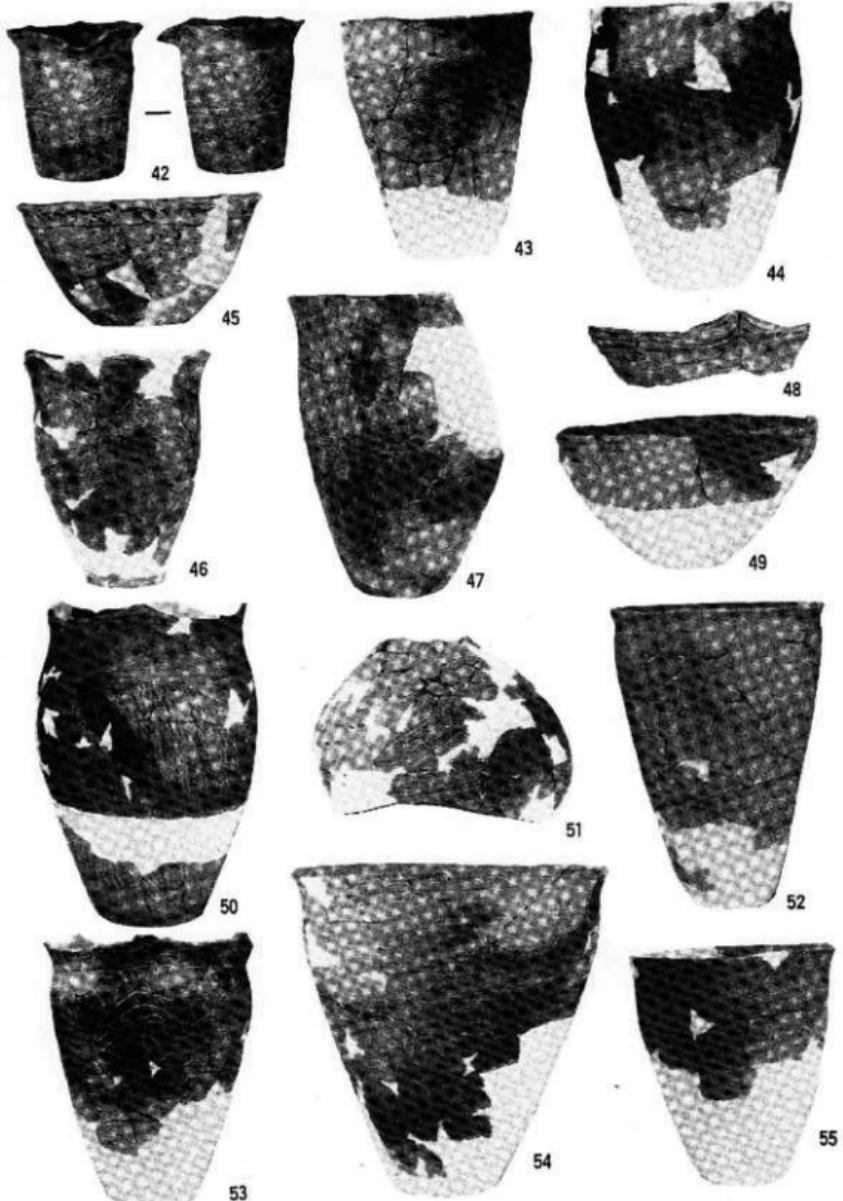
PL12 E区の調査



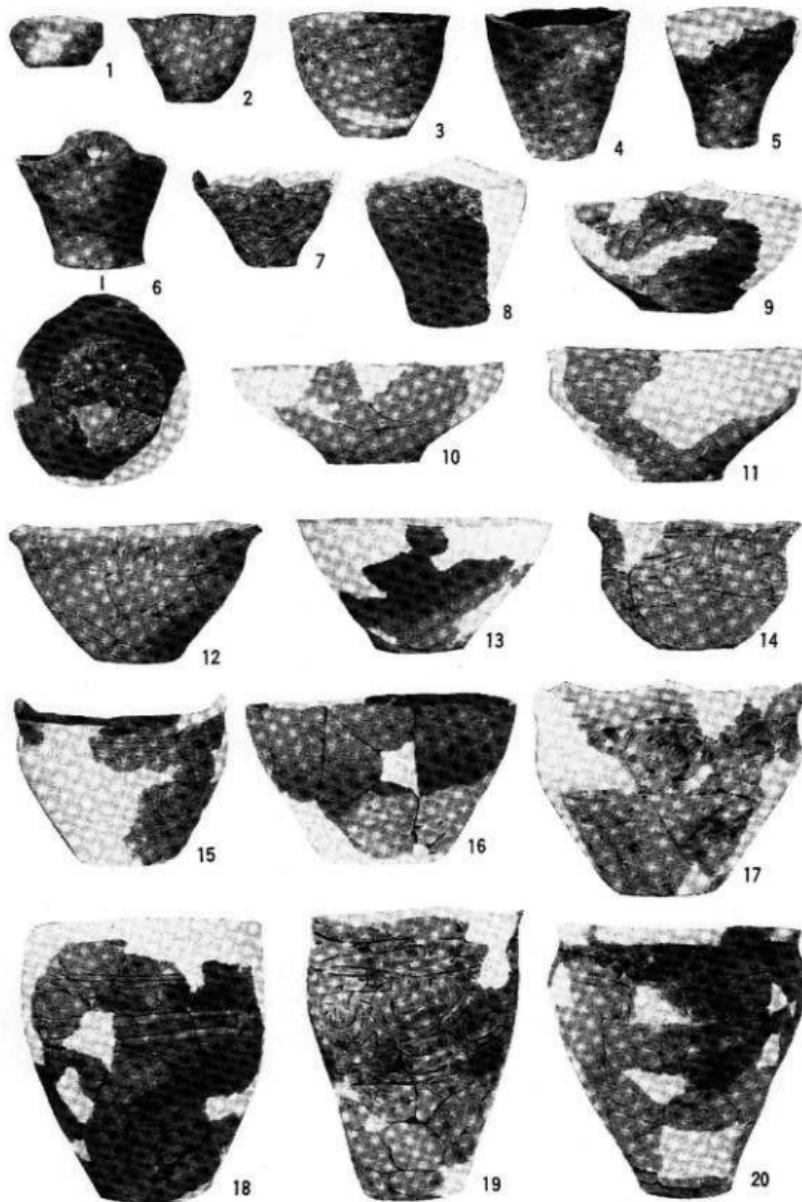
P L 13 D 区遺構内出土土器(1)



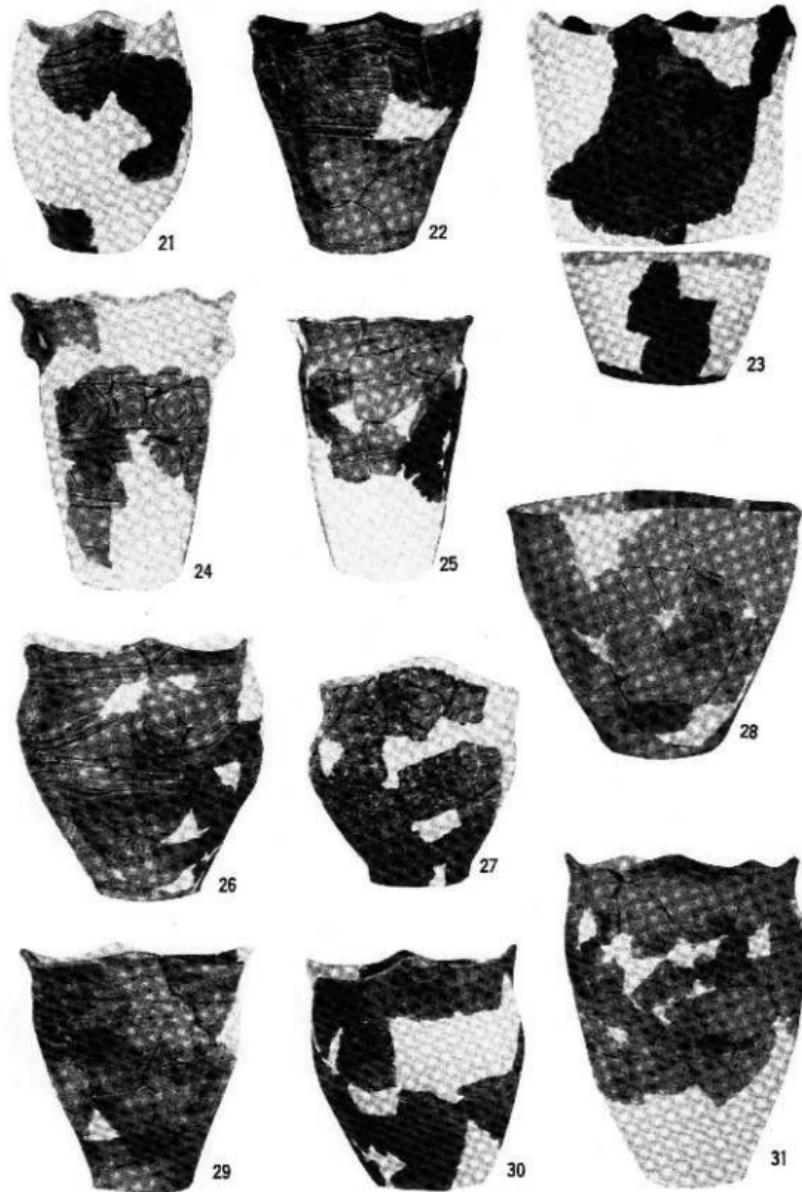
PL 14 D区遺構内出土土器(2)



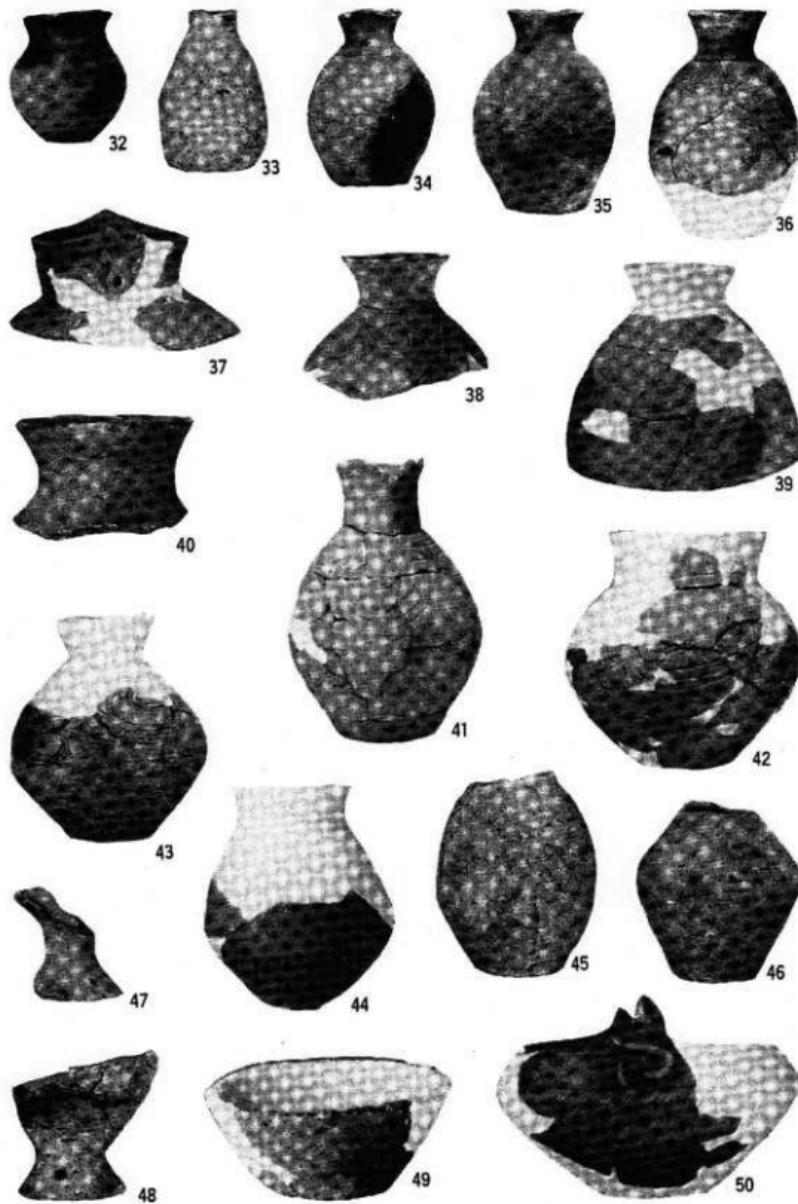
P L 15 D 区遺構内出土土器(3)



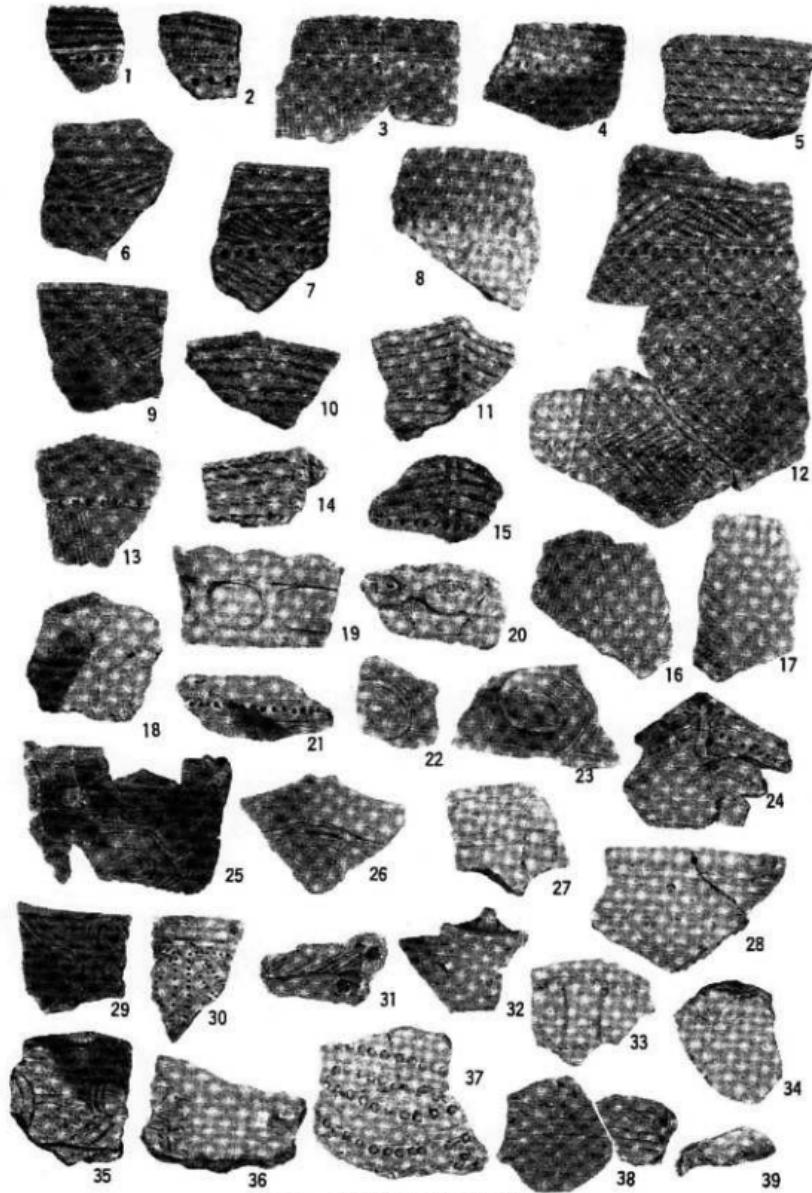
P L 16 D 区遺構外出土土器(1)



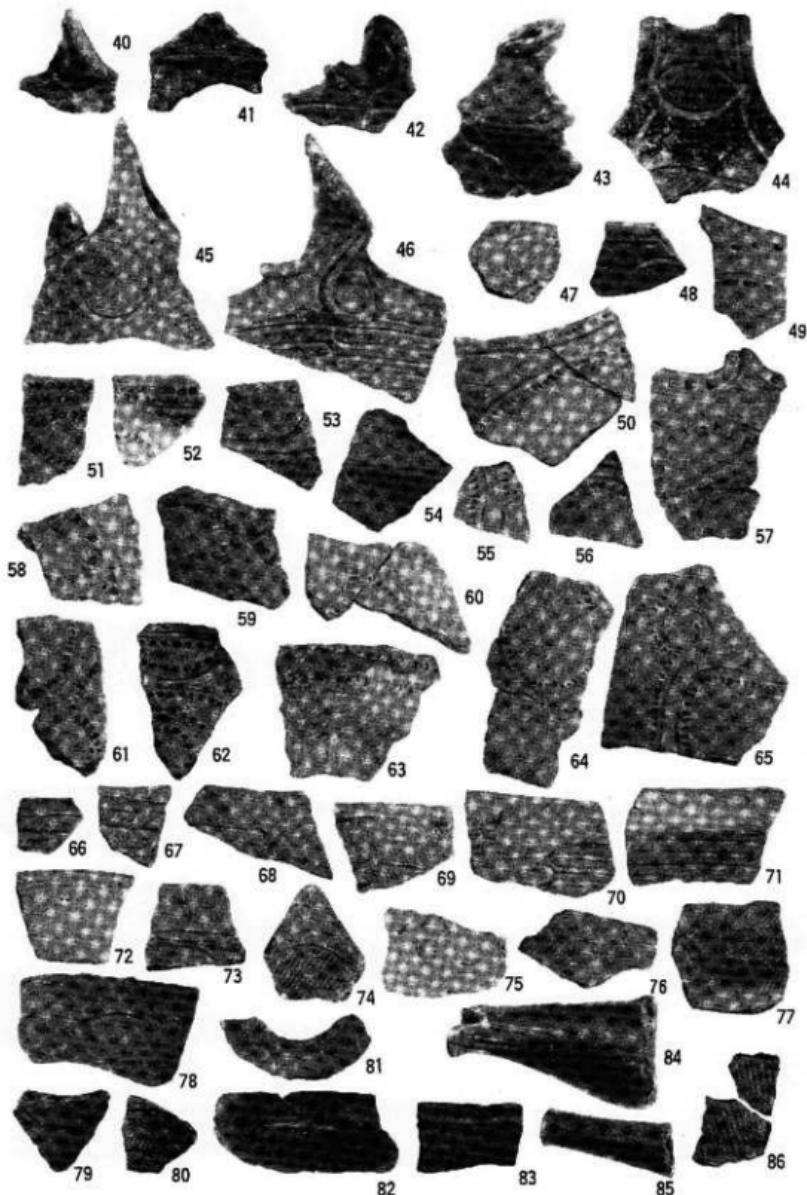
P L 17 D区造構外出土土器(2)



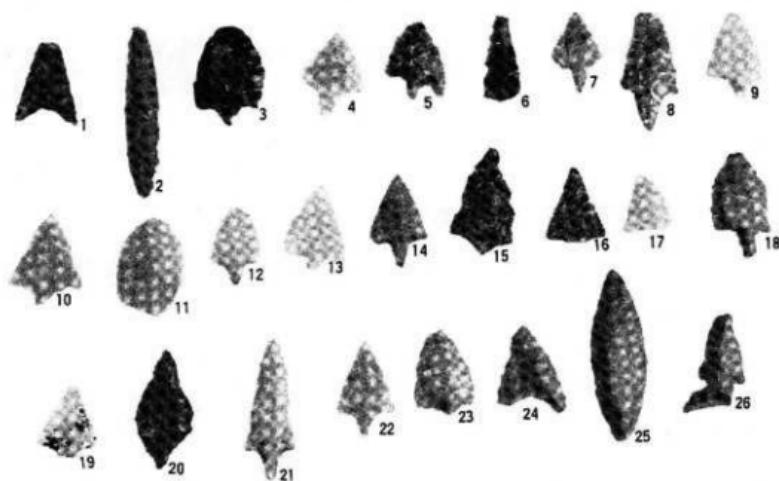
P L 18 D区遺構外出土土器(3)



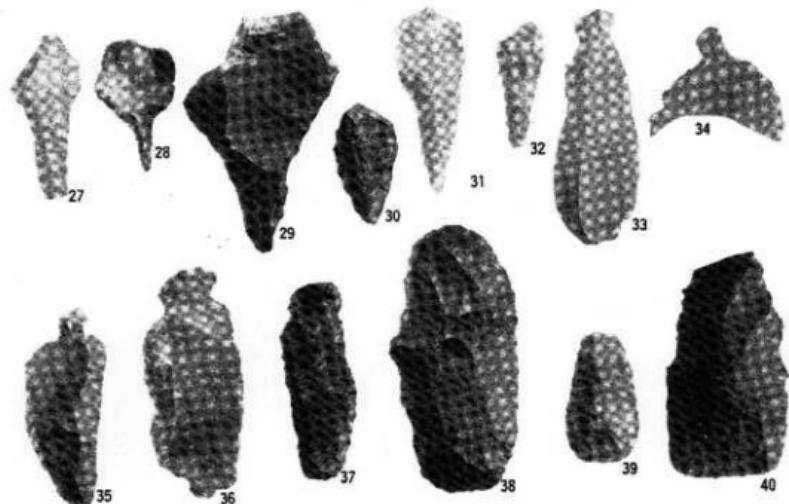
P L 19 D 区遺構外出土土器(4)



P L 20 D 区遺構外出土土器(5)

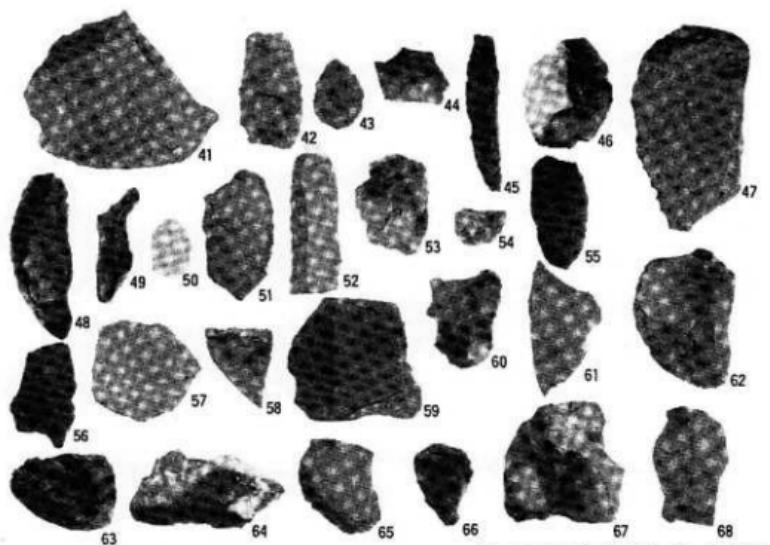


(1~23…遺構内、24~26…遺構外)

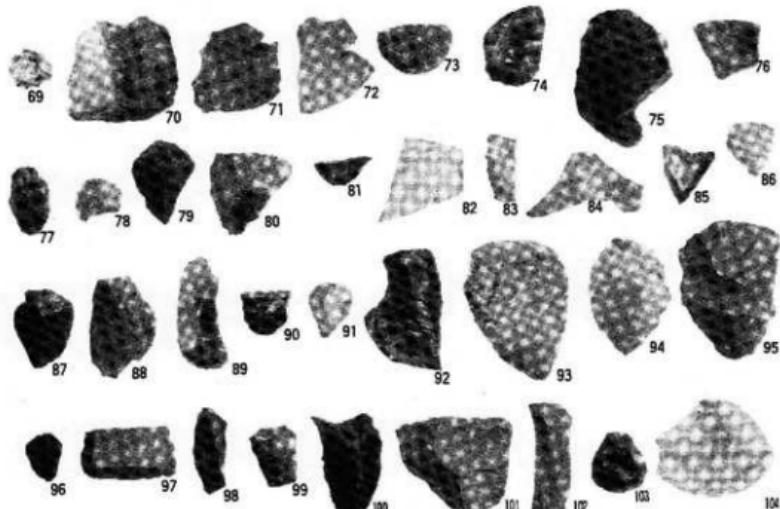


(27~37…遺構内、38~40…遺構外)

P L 21 D 区遺構内・外出土石器(1)

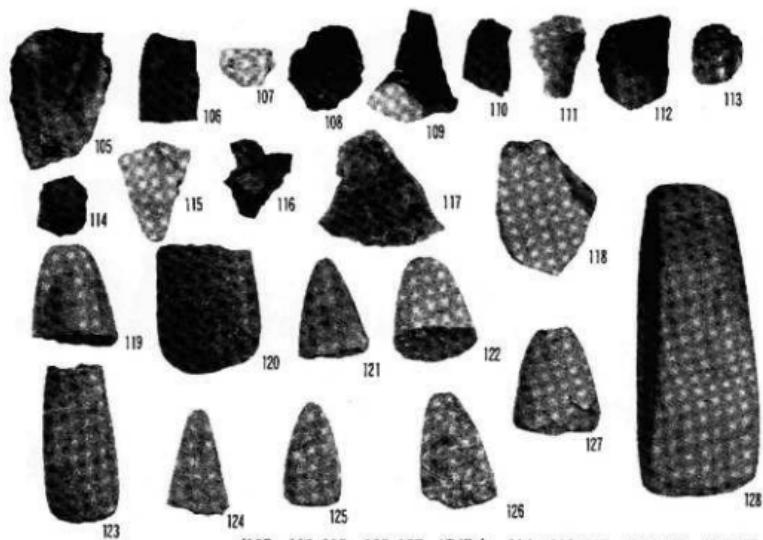


(41~62、64~68…遺構内、63…遺構外)

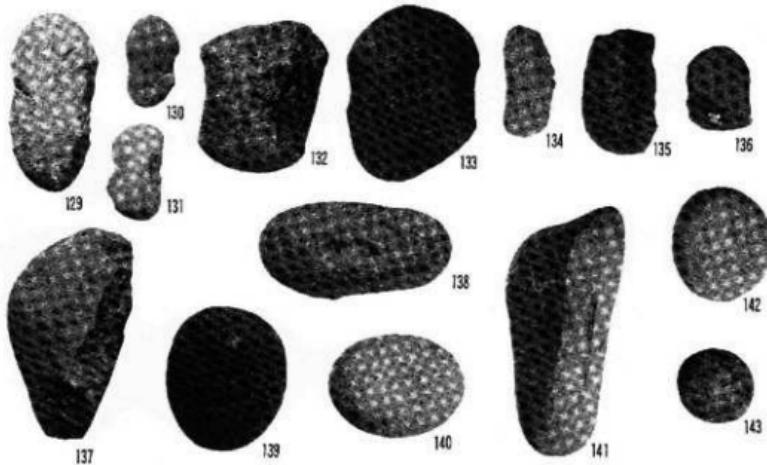


(69~96、98~104…遺構内、97…遺構外)

P L 22 D 区遺構内・外出土石器(2)

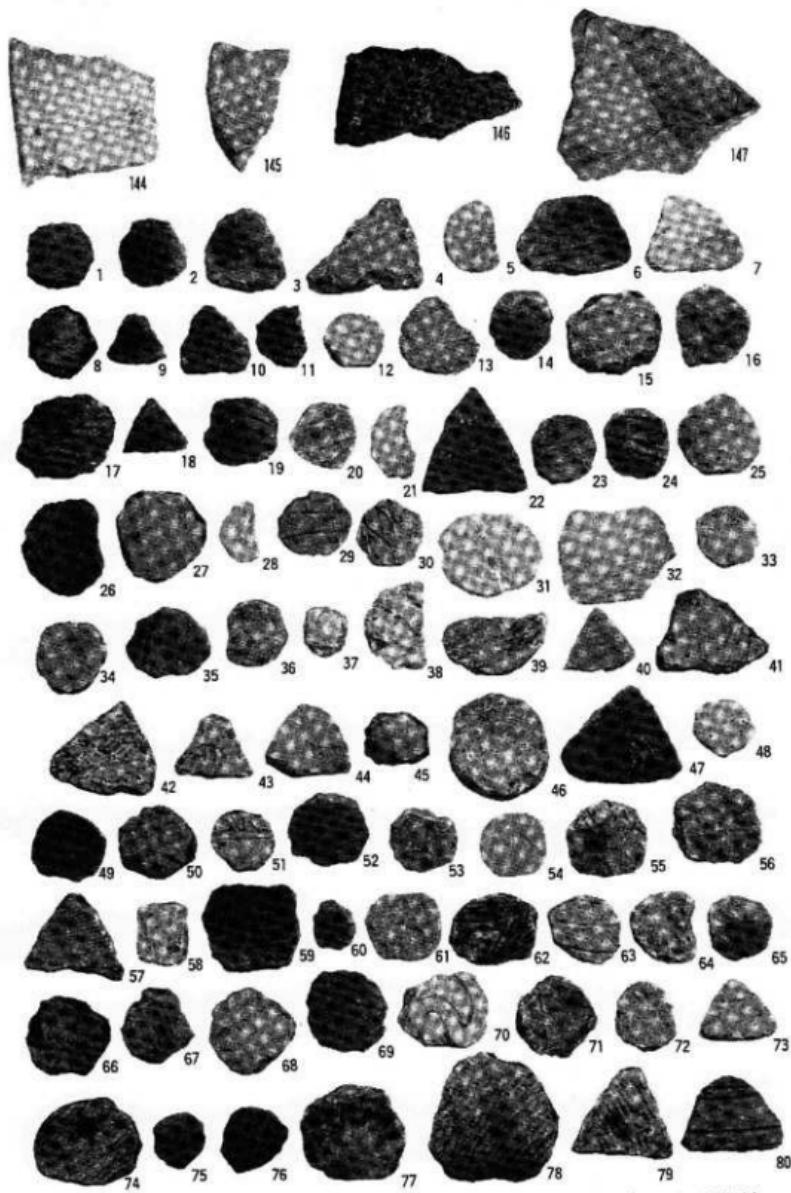


(105～113、119～122、127…遺構内、114～118、123～126、128…遺構外)



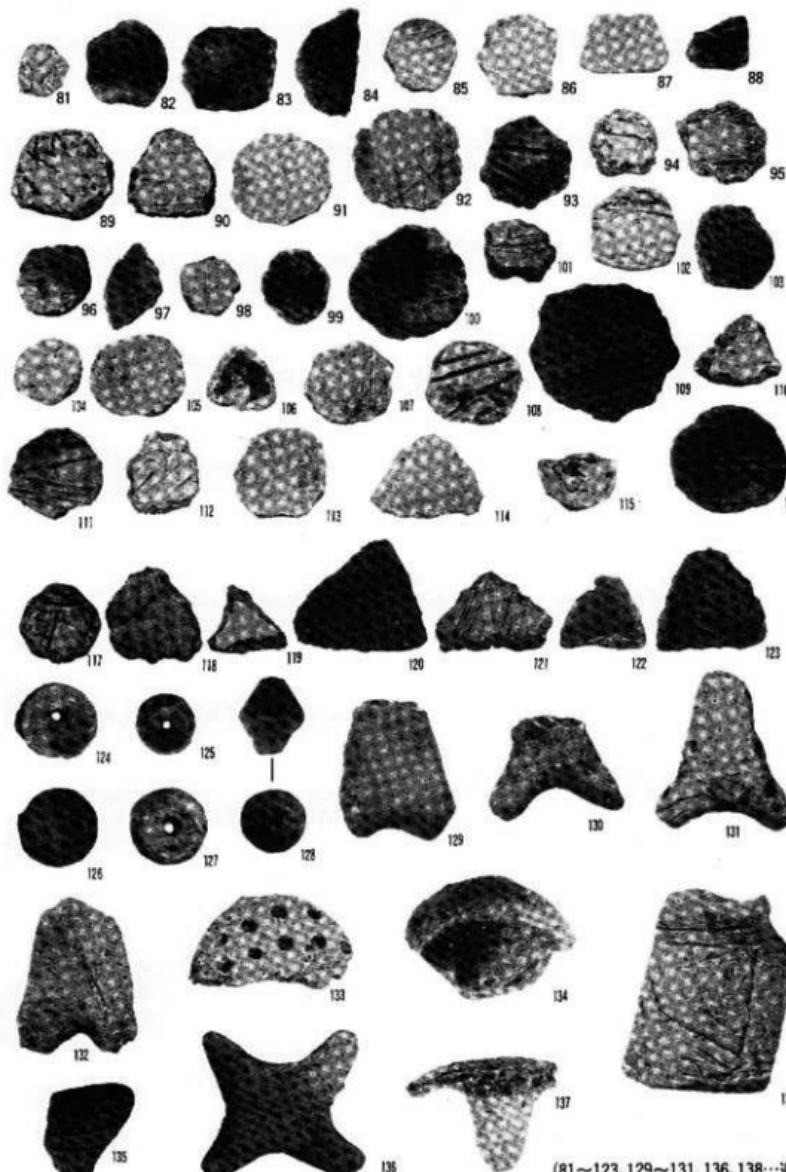
(129～140、142～147…遺構内、141…遺構外)

P L. 23 D 区遺構内・外出土石器(3)



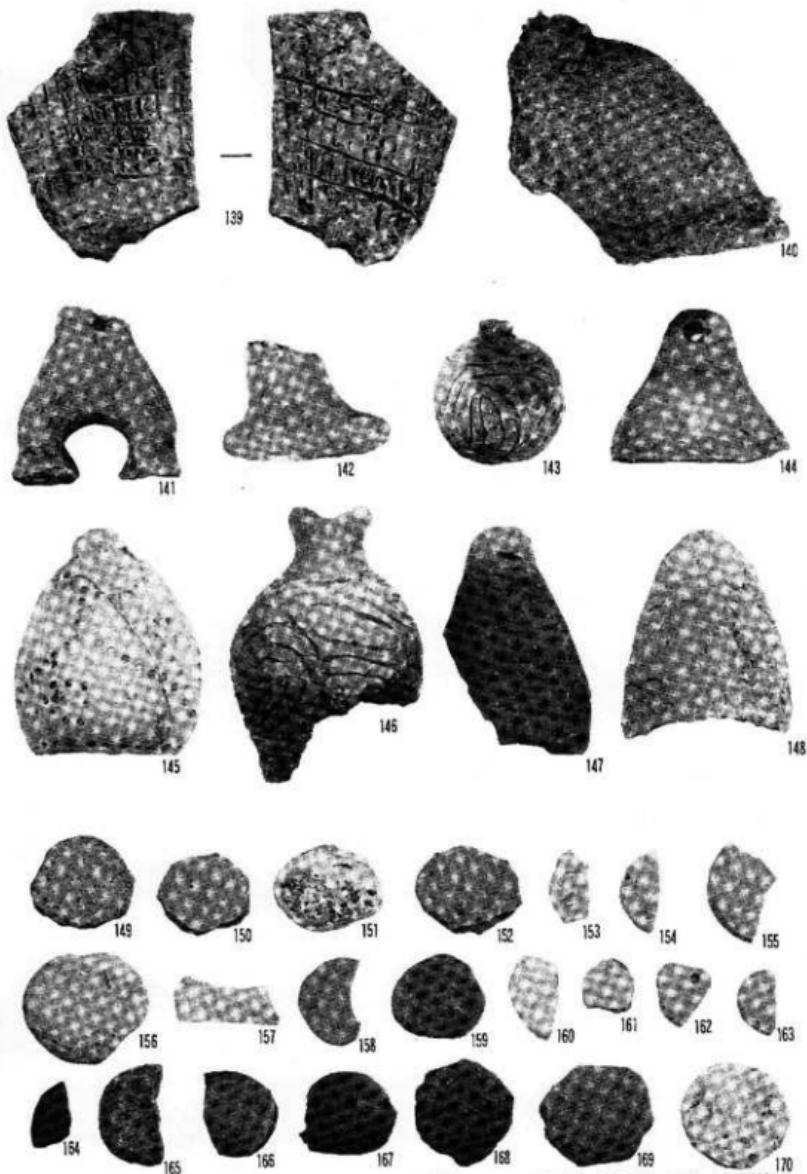
(1~80...遺構内)

P L 24 D 区遺構内・出土石器(4)、土製品・石製品(1)



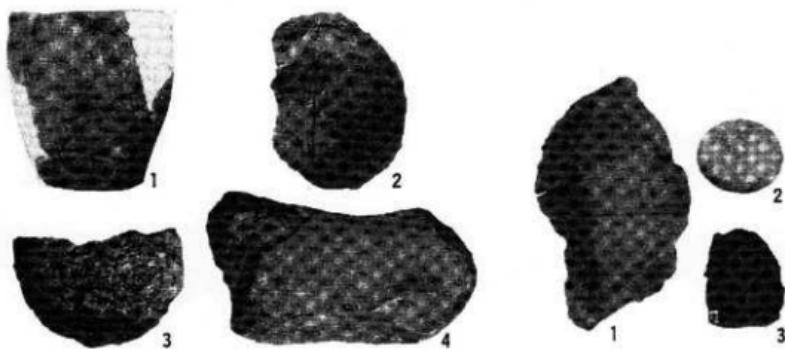
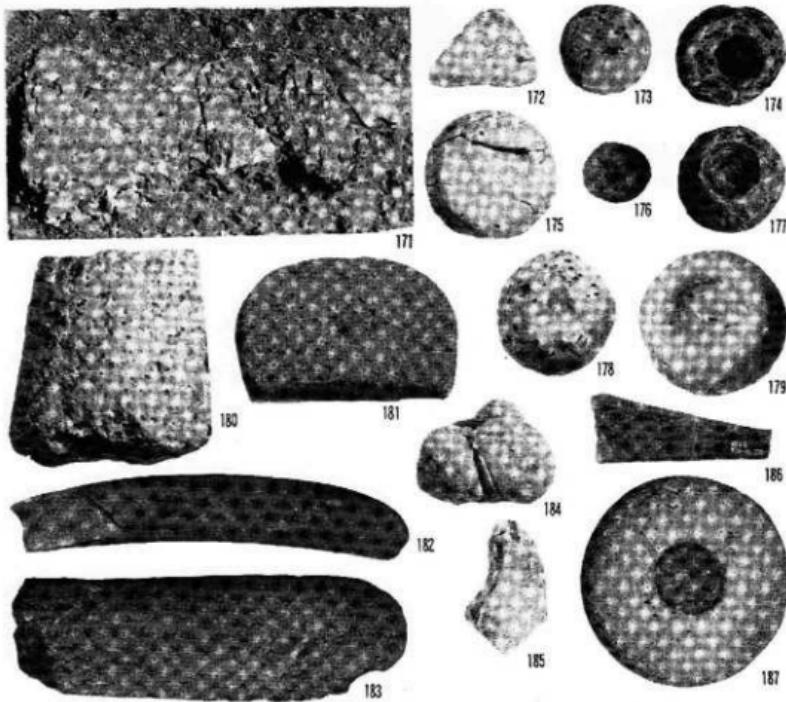
(81~123, 129~131, 136, 138…遺構内、
124~128, 132~135, 137…遺構外)

PL. 25 D 区遺構内・出土土製品・石製品(2)

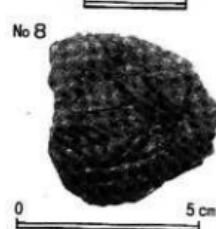
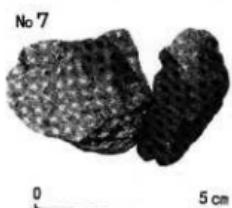
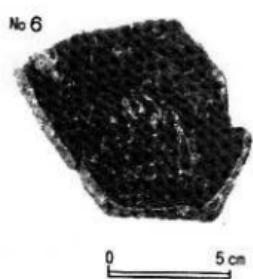
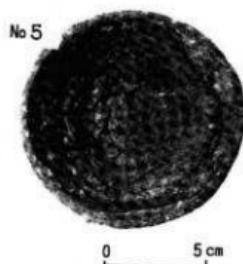
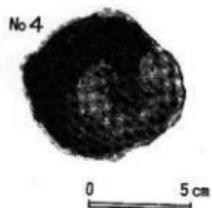
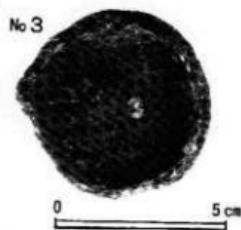


(139, 140, 143, 149~160…遺構内、141, 142, 144~148, 161~170…遺構外)

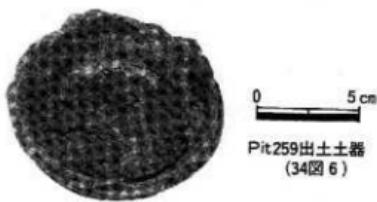
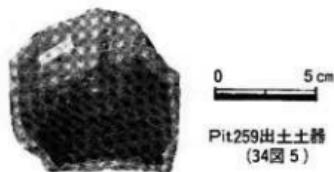
P L 26 D 区遺構内・出土土製品・石製品(3)

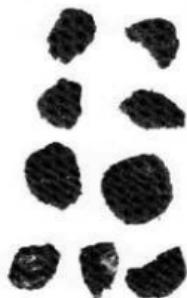


P L 27 D区遺構内・外出土土製品・石製品(4)、歴史時代の遺物、E区石器

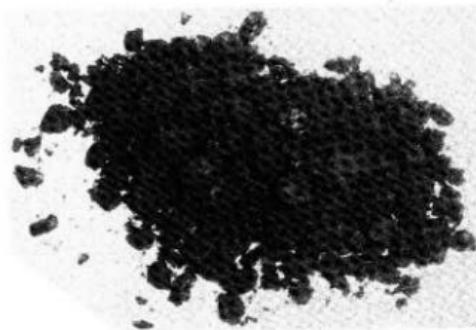


※No. 3～No. 8 は分析試料





Pit114出土堅果類



SK258出土堅果類

P L 29 遺構内出土堅果類

鹿角市文化財調査資料 33

大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(4)

発行年月日 昭和63年3月31日

発 行 者 鹿角市教育委員会

〒018-52

秋田県鹿角市花輪字荒田4-1

TEL 0186-23-5111

印 刷 所 (有) 大館孔版社